スカラー兵器による破壊工作の全貌

今、証されるマインド・コントロールの恐怖！

地球規模における環境破壊の真因を解明！

科学時代の啓蒙書

JI 第22巻特別増刊号No.2

ＪＩ
＝正法の集い＝
第２２巻特別増刊号No.2
インターネット公開版

発行日　平成11年10月25日

電子書籍作成　平成17年 5月 3日
最終更新日　平成18年 1月 3日
作成者　エルアール出版
（旧ジェイアイ出版）

©1999-2006 ALL Rights Reserved 無断引用・転載を禁ず

はじめに

『JI』特別増刊号（既刊三巻）「迫り来る地球の危機」「環境問題の本質を問う」「迫り来る地球の危機II」に続く待望の第四巻「スカラー兵器による破壊工作の全貌」

——震撼する驚異のテクノロジー

千乃裕子会長を攻撃している手口はこれだ!!

弊社はこれまで、左翼系列によるスカラー兵器を用いての破壊工作の数々——即ち、保守系人脈に対するマインド・コントロール、自由主義国要人暗殺、地球環境や生態系の破壊等について、太陽系のカタストロフィーさえもたらす深刻な問題として、社会に警鐘を鳴らすべく刊行物を通じ啓蒙活動に邁進して参りました。

この度、『JI』誌上で自然環境破壊と共に、特に焦点を当て告発してきたマインド・コントロールに関して、米国での実情を示す重要文書の大量入手があり、ここにそれを紹介し、読者の皆様に供したく存じます。合衆国憲法の理念に基づき、米国国民は自らの基本的人権を守るべく、最先端兵器によるマインド・コントロールの被害に関して、各方面への資料配布や議会公聴会での証言、又、司法機関への提訴等積極的に展開、是正を求めていることが明らかとなりました。元台湾国防省陸軍中佐アラン・ユー氏他のレポートは、我が国における左翼系列の手による破壊工作の詳細について理論的に証明するものと言えます。

更に、当科学担当グループは、最先端テクノロジーであるスカラー波に関し精力的に実験を行ない、『JI』九九年三月号では、マインド・コントロールについて、その驚愕の実験結果（＊左記に要旨掲載）を発表し、私達正法グループへの破壊工作の実証と共に、自由保守主義の危機的状況を明らかに致しました。

当レポートは、統一地方選を控えていた当時、左翼勢力の伸長を予測し、世人の注意を喚起するものでしたが、結果は周知のように日共の大幅議席増に終わってしまいました。道府県議選では一・五倍増の百五十二議席と過去最高議席を獲得（兵庫、高知では議案提出可能な議席数を取得）、

市議選でも初めて千議席を超え、空白議会の克服が着々となされています。中央政府の権限と財政の剥奪、弱体化を目的とする昨今の「地方分権」の流れと共に、地方からの左傾化を心から憂慮するものです。

このような現状の中、地球規模の異変も未だ止むことなく、事態は益々悪化の一途を辿っている今、年初に刊行した『迫り来る地球の危機Ⅱ』（九九年一月）に続き、第二十二巻特別増刊号No.2を急ぎ発刊、世に問うものでございます。私達の指摘して参りました送配電線等におけるスカラー波・電磁波アンテナ工作（違法工事）の是正は急務であり、一人でも多くの方に本書を手にとって頂き、私達を取り巻く環境が、真実どのようになっているのかご理解いただくと共に、スカラー波による左翼勢力の破壊活動防止の真の意味を私達に示しておられる千乃裕子会長（世界におけるその破壊活動防止の先駆者）のご意志が皆様に伝わることを願って止みません。

（JI編集部）

＊　＊　＊

＊　＊

こんなに簡単！　スカラー波を用いたマインド・コントロール（要旨）

科学班

実験内容は、スカラー波発生器に差し込んだ絵の図柄を言い当てるという単純なもの。図柄は、いわゆる超能力の研究で有名なＥＳＰカード（丸・三角・四角・星・波）を使った。五種類のカードを当て推量に言えば、統計的な正解率は五分の一、二〇％のはずだが、今回の被験者三名の正解率はそれぞれ八〇％、六〇％、四〇％だった。個人差はあるものの、これだけでもスカラー波によるマインド・コントロールの可能性が実証できる。

この実験で特に興味を引いたのは、偶然にも、被験者が思い浮かべたイメージが、スカラー波発生器を扱う送信者のイメージに一致する場合があったこと。具体的には、スカラー波発生器で正三角形の図柄を送信しながら、頭の中で送信者は、三角錐（正四面体）が空中で回転しているイメージを思い浮かべていたら、全くその通りのイメージが伝わったケースがあった。

以上から、スカラー波の濃度が高い場所では、簡単にマインド・コントロールされ、更に個人の感情や思考が他人に伝搬してしまうこと、そしてその方法が意外と簡単であることが分かる。もっと工夫すれば、例えば、クリントン氏がテレビ演説しているときには好印象の人工スカラー波をテレビ電波を利用して流すことも可能だと思う。〔だから、左翼ゲリラ（ストーカー）が千乃の大脳に集中S波攻撃を行ない、同時にインターネットなり、連中の腐った頭の中味なりを伝えるのはいかに簡単かということですよ!!　更に、千乃の車の作業をするキャラバン・メンバーやボランティアが、自分の頭の中味（妄想）を千乃に送り、逆反射されると、それが千乃から来た!!とばかりに鬼の首でも取ったようにこちらにアタックする。全く千乃こそいい迷惑です!!　千乃〕

（傍線は千乃による。）

目次

はじめに……1
雑ノート……貴巌幹子……6
詩十三篇……貴巌幹子……89
ひっそりと死んでいった小さな黄色い蛾／小さな雲雀よ！　天を告げる鳥よ！／北海道広尾線の「幸福」駅にエサをもらいに来る一匹のリス／ネコのラブちゃんに捧げる悲歌（エレジー）／カラス何故鳴くの。カラスは山に――／秋田県象潟町の村おこしで殺された哀れな野がも――／聖と美を冒涜するキャラバン隊／燃えさかる悪魔の獄舎（ひとや）、この煉獄の火の中で／カラスの受難／さようなら　美しかった地球よ！／小さな薄緑色のクモ／生き物を傷付けて楽しむ釣り人のエゴ／ツキノワグマに捧げる哀歌
違法工事写真スケッチ……127
スカラー波の実証実験……科学班……156
キャラバンで起こる幻聴・幻視のメカニズムを解明する……162
ミリメーター波とマインド・コントロール……アラン・ユー……168
プライバシーと思考の自由を踏みにじるマインドコントロール兵器……アラン・ユー……178
マインド・コントロール・フォーラムの犠牲者―ノーマン・ラビン……247
貧乏なダウ株式産業は、人の家の屋根を通し盗見をして金をくすねる……253

マイクロ・ウェーブ・ハラスメント及びマイインド・コントロール実験……259
私の命は貴方に委ねられています！……マーティ・コスキー……295
マインド・コントロール・フォーラム　被害者のストーリー……311
神の呟き……小泉万馬……315
人工スカラー波で、次は鳥が絶滅か！……北川敬一……321
身近に迫ったスカラー波、電磁波による環境破壊……森　耕作……323
一、左翼ゲリラはヒラメと同じ、低酸素型の単純思考タイプ／二、一九九九年は、更に異常気象が加速する
蔓延し、猛威を振るうマスメディア毒にご注意……北川敬一……325
S波による酸欠と重力の減少……小泉万馬……330
わかりやすいスカラー波の説明……335
小児白血病と送配電線……滝由紀夫……346
スカラー波と人体について……大岡　広……352
スカラー波の人体に与える影響について—歯科領域における考察—……河井浩徳……358
二十一世紀の宇宙論（新宇宙論）……小賀竹留……367
共産党の「民主連合政府綱領」を改めて読み直す……竹野恒之……447

〝カラス何故鳴くの。カラスは山に――〟

畑や土手の地中から、大好きなミミズを掘り出して食べるカラス達は、人が見ると、いかにも落穂拾いをしてエサをあさるように見え、盗人鳥に見えます。でもカラスは土の中の虫を探して餌としているので、スズメと同様に人間社会に害をなす習性はないのです。

虫が見つからないと勢い、ゴンベのまいた種をほじくることになりますが、その為のカカシもあるし、鳴子もある。

共産党や社会党員の部落では空砲でタヌキおどしをする所もある。

なのに何故カラスを大量に森林組合が猟銃で殺すのか、それが判りません!?

カラスが〝有害鳥〟なら、人がハトのフン害に悩むハトも〝有害鳥〟として殺さなくてはならないのでは？

スズメもそうやって殺したのだし――。

そしてムクドリも増えすぎると煩いから「有害鳥」とする!!

セミもカエルも増えすぎると煩いので〝有害虫〟として殺す！

でないと生態系が破壊されていて、数が増えすぎるので、

人間社会が侵害を受け、勢い一種一種殺さねばならない。
それにしても人なつっこく、優しい人にだけなつき、縋るカラスは
知能が犬並みであるだけに哀れで、九官鳥やオームを虐殺するような印象がある。
今生きているカラスは一昨年親が死に、
子烏(こがらす)が少しずつ成長している過程だから、甘えん坊で明るい。
動物の行動学によると、
カラスは一度に食べ切れないものは土に埋め、後で掘り出して食べるし、
腐った物は食べない。これが畑荒しに見えるのかも知れない。
仲間の一羽が傷つくと、皆で隠して、守ろうとする
象の群れの知能も備えている。
この国では、カラスは世捨人や、孤独な修業僧や、子供達の友人であり、
童謡の主人公。公園や神社の森や林に宿をもらう智恵ある鳥達。
海猫のように感情が豊かで、時には人間よりも賢い。
無邪気で、人に対して悪意など少しもない。
それにしても畑にエサを求めに来る野生の動物に悪意などあるのだろうか？
サカキバラ・セイトの更生法云々と言う人間社会で、
生死の境で餌を求める動物や鳥達を殺す権利はあるのだろうか？

誰が人間にその権利を与えたのだろうか？　誰が？？
カラスが嫌いだとか不吉だという偏見は西欧社会から輸入された概念。
それは白人よりも生命力の強い黒人に対する種としての劣等意識。
ハトよりもカラスを忌むのは、黒猫を嫌うのは、
西欧の神話が、白を聖なる天の使いとし、黒をサタンのものとした。
その偏見が介在しているのではないだろうか。
しかしノアの昔、ジウスドラの昔、
エホバ、ヤーウェの真正なる天はカラスを嘉し給い、洪水を生き延びる箱船に
招じ入れて、ハトと同じ、新しき天地を探す鳥として選ばれた。
では、誰がカラスを有害な鳥と定めたのか。
白人、そして白人崇拝主義のアジア人ではないだろうか？
でなければ〃差別を声高に叫ぶ〃国際主義のマルキシスト。
そしてそれに煽動、マインド・コントロールされる人々。
少なくともムー大陸やアトランティス大陸から来た子孫達ではない！
宇宙から叡智をもたらした神々の子孫ではない!!
その時天と人と動物と自然は、少しの争いも闘いもなく調和していた――。

（十二月）

〃カラスの受難〃

太古の昔から〃人の友〃であったカラス達が、
この二十世紀、日本という天に弓引き、マルクス主義を信奉する
背徳と殺戮の小国にて、
鳥の中で只一種、人為的に殺され、絶滅を計られている。
ソドムとゴモラの如き、背徳の民は、神代の昔、神武天皇の東征に
道案内をしたカラスを忘れた！
太古の昔、地球をおおう大洪水に、ノアの方舟に招じ入れられ、
ハトと共に人類の再生を導いた神に愛されしカラス。
古代中国では太陽の象徴。
大英帝国の繁栄を支えしカラス。
日本や古代中国やギリシャ神話に現れ、北欧神話に表れ、
日本の天皇家の象徴であるカラス。亡き昭和天皇の慈悲ある御配慮で
明治神宮や上野公園に棲家を与えられ、
数年前迄は人と共に生き、遊び、幸せだった――。

今は、反日、反天皇制の背徳の左翼勢力が目の敵(カタキ)にして、
何かと理由をこじつけて射ち殺そうとする。
九官鳥に似て、愛すべきカラスを、人為的に銃で絶滅させることは、
このソドムとゴモラの国、日本の最後を象徴する――。
神に守られし霊鳥であるカラスを、目の敵にして殺すことは、
天に弓を引き、人類の滅亡を招く行為。
左翼や左翼のシンパに雇われて、動物を殺すことが生業(なりわい)の
猟友会には、それが判らない。
秋田県で烏(カラス)を殺し始めてから、
〃三本足のカラス〃が旗印の日本のサッカー陣も総てが裏目に出た。
今日本国は天地人の異常に気付かぬ愚かな市民と
その愚かさを造り出し、操る左翼勢力と、
共に地球の滅びに向けて、生存の崖っぷちに立たされ、
しかも左翼の傀儡(かいらい)となって目隠しをされた市民は、
一歩踏み出せば奈落(ならく)の底!!　それを知らない。

（八月）

〃小さな薄緑色のクモ〃

二月になって寒椿が梅の花の床しさに変わる頃、
私の時々の食物を入れるスーパーの買い物袋の、
お茶やジュースの紙パックや、クッキーの包み紙、
クリーム・スープを飲んだ紙コップの間に
潰れて入っていた小さな薄緑色のクモ。
伸びてしまった数本の繊維のような脚の中央にくっ付いていた
薄緑色の、三ミリほどのひしゃげた塊り。
〃お腹が空いていたのね、可哀そうに。〃
今の世界、特に日本は〃心〃を持たない
十四、五才の中学生世代や、それを真似た中年の、
残酷な動物への仕打ちが流行ってる。
恐らく三流週刊誌と新人類マスコミと日教組が
短絡人間を量産し、国を売る反日人間が、
欲求不満の解消に可愛い動物（ペット）を殺して満足するのだろう。
力弱く、無抵抗な生物（いきもの）を殺すなど、これはもう連続殺人魔の世界。

司法の力があまりにも左翼イデオロギーや刑事犯に対して
弱められすぎた日本。
凶悪犯を庇いすぎる日弁連は、
知能の遅れた子供を殺した保母を無罪にし、
その為県警本部長を自死に追い込んだ。
あまりにも多くの魚類や鳥や、小動物や虫が殺されすぎた――。
これはペルーと同じ世界。もっと悪い!!
テロと殺戮を楽しみにする元全学連の大人と、残虐非道な子供の社会。
教育の是正とモラルの回帰を叫ぶには甚だ遅すぎる感がある――。
天の法に従う（果たして従っているのか）正法者でさえ
何が犯罪であるか、そうでないかの知識もない――。
キリスト教徒でさえ
〝汝、殺すなかれ〟の戒律は何を指しているのか判っていない。
何という世の中だろう。
神を見、神により頼むにはあまりにもかけ離れたモラルのない国。
この日本という国は――。

（一九九九年三月二十五日記）

〝生き物を傷付けて楽しむ釣り人のエゴ〟

自然界の危機に無自覚で大雑把な、サンケイ新聞の〝釣り人情報〟がいかにようやく戻ってきた自然界の生き物を傷付けているか――。

四月二十八日の〝高齢社会〟の投書に慄然とした。

大阪府松原市の六十四才の方から――。

近くの川辺で釣り人が食べもしないのに魚（コイやフナ）を釣り上げ、魚達はまだエサが足りないので、〝ルアー〟にすぐ掛かる飢えた魚達に、亀も同じ。すぐ釣り餌に喰い付いて、釣り上げられる。

そして邪見に針から外されてコンクリートの車道にフェンス越しに投げ上げられる。エサがないのですぐ掛かる。

そして、捨てられ、口から血を流して動かない亀が二匹、三匹と車道に。

人間は飽食して自然界は飢えているのに――。

（その無慈悲な釣り糸で鳩もケガをさせる――。）

遊びで、哀れな、充分にエサのない生き物を傷付けて楽しんでいる――。

何という日本人。何という哀れな日本の自然界よ!!

自然との共存に無関心で、心を持たない新人類が、

サンケイ新聞にも、釣り人にも、ハンターにも居て、

無責任に総てを傷付けている!!

（四月）

〝ツキノワグマに捧げる哀歌〟

クマよ、クマよ、ツキノワグマよ！
お前達はこの国に生きていてはいけないと言われているの？
冬の間は冬眠をして、そんなに食糧を食べ尽くす訳でもないのに、
椎の実やどんぐり、木の実を食べて、
沢に一匹でも泳いでいてくれたら、サケやフナでも食べられるのに、
お前達の食べられる魚も無いのね！
飢えて、弱って、人間を殺すほどの体力も無いのに、
人が恐がるから、同じように恐がって噛みつくだけで殺しもしないのに。
お寺で飼われて人になついていて、人間の悪心でオリの戸を開けられ、
迷い出たトラも殺されたけれど、クマも姿が大きいというだけで恐がられ、殺される!!
小犬を殺しもしないクマを――。
沢に魚が無いから野ネズミや野兎を蛋白源にして、それも多くは居ない！

小動物も皆飢えて死ぬからクマの餌がない！
絶滅に瀕している、保護指定のツキノワグマの餌もない!!
人間には、あり余るほどある食糧もクマにはくれない！
タヌキもイノシシもイタチもカラスも、山の動物に餌をやる
優しい人は少ししか居ない！　この国には数える程!!
哀れなツキノワグマよ！　共産党員でない人でも優しい心を持つ者はわずか!!
海を泳ぐ多くの種の魚達も、クジラもイルカも、
悪の魂を持った共産党員とそのシンパに致死性のスカラー波を
十年間も河川や海にたれ流し、海に酸素が減り、海底には無くなり、
クラゲもヒラメもサンゴも、犠牲になっている。
それだのにまだ根こそぎ〃魚を捕れ〃、
水鳥や中、大型の魚から、海の総ての生物から〃餌を奪え〃と、
河川や海釣りばかりを勧める狂気の人達――。
クジラが死ぬのは海中の餌が無いのと酸素が無い為。水鳥や渡り鳥が死ぬのも同じ――。
クマが死ぬのも、カラスや大型鳥のように
羽根を持たず、飛んで餌を探せないから。

地表はスカラー波のガスがたれ込めて、大気の酸素も少ない。
水素も汚れて化学反応を起こさないので、有毒ガスや成分が、
土壌や大気、水にもたまり、毒性を増やしている。
自然界は死に瀕しているのに、この国の人は自分達だけの特権で、
武器があって殺傷力が強大な、動物の王者だから、総て殺しても良いと考えている!!
アフリカの原住民でさえ、種を絶やさないように、
自分達の必要な食糧以外は野生の生物を殺さない智恵があるのに、
日本人は愚かな民族！
自分達の食糧になる魚も大量に殺して何も感じないし、考えない!!
愚かで身勝手な民族！
北鮮に似た民族性!!
愚かな独裁者の為に、彼の国の国民は飢えに飢えて、中国や韓国に逃げ出したくても、
武装兵士に殺され、兵士の厳重な見張りの付く柵や鉄条網で阻止され、
何処へも逃げ出せない！
ツキノワグマよ、お前達も同じように、
エサももらえず、何処へも逃げ出せずに殺されていく——。

北鮮では子供も幼児も殺されるが、日本では動物の子供が殺される!!

ツキノワグマの一年にようやくなったばかりの仔熊が頭を鎌でなぐられ、

怪我をして死んだ――。（成長したクマはナタで頭を割られ、）餌が無いから回復力がない。

共産政権下の国民と同じ。動物とて人間の食糧が無ければ、殺されて食べられる。

でもこの国、日本ではまだまだ食糧は豊かにある――。

日本は最早自由主義国ではない！　赤化されつつある。だから人は鬼になる!!

無いのは優しい心だけ――。鬼のような人間――。

クマよ！　ツキノワグマよ！

この国、日本に生きる動物も鳥も（見せ物になる動物園の動物も哀れだけれど、）

自然がこの国の人の心ない悪意で破壊されつつある今、

食物（たべもの）を求めるだけで殺される

哀れなツキノワグマよ!!

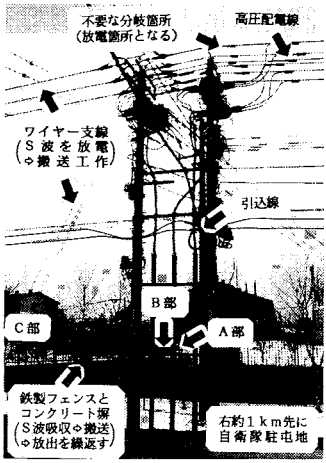
（七月五日記）

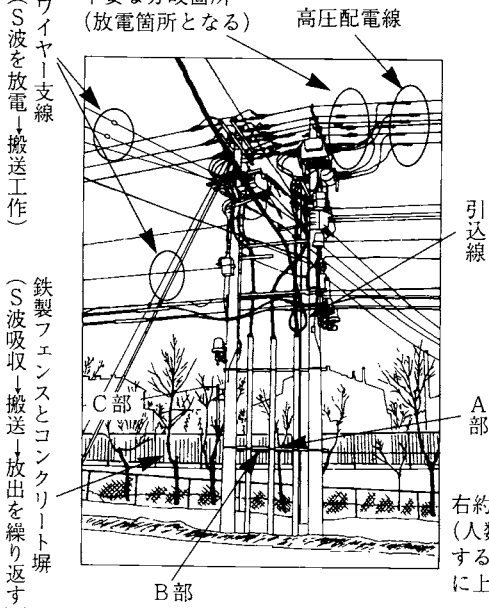
違法工事写真・スケッチ

北海道網走郡美幌町周辺の報告

通勤途中の変電所前のデータです。B部の所一・五メートルの位置ですが、どうしてもシャッターがおりませんでした!! 少し場所を外しシャッターを押すとおります（その後、写そうとしましたが、シャッターはおりません!!）。尚、この付近は冬の初め頃、単独事故がよく起きている所です。

（北海道　K・S）





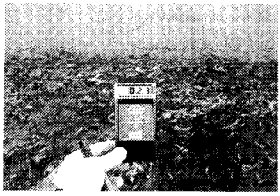
電磁場測定値

地上0m……40.9ミリガウス！
0.5m……73.2　〃　！
1m　……108　〃　！
1.5m……128　〃　！

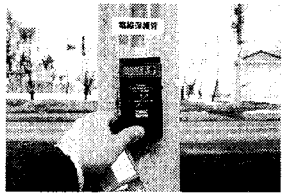
（B地点の地上1.5mではシャッターがおりませんでした!!!!）

（何とも言えません。ますますエスカレートして―。マスコミの隠蔽は犯罪の共犯です！　千乃）

右約1km先に自衛隊駐屯地！
（人数も多いし、火器や兵器がアースするので、電磁場レベルを最高レベルに上げているんです！　千乃）

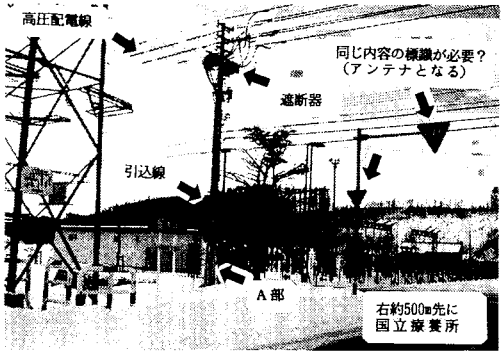


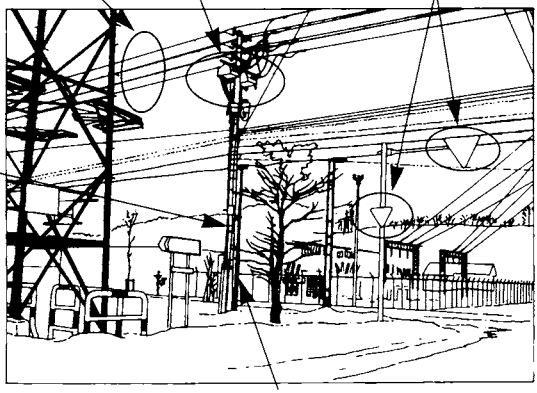
C部で測定



A部アップ

北海道網走郡美幌町稲美変電所付近

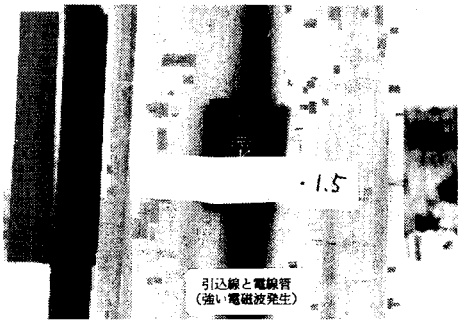




右約500m先に
国立療養所!!

電磁場測定値

地上0m……142ミリガウス!!!
0.5m……151　〃　!
1m ……151　〃　!
1.5m……154　〃　!
（地上2.1mでは511ミリガウス以上!!!）
（段々強い電磁場になるではないですか！
国民がごま化されている間に―。　千乃）



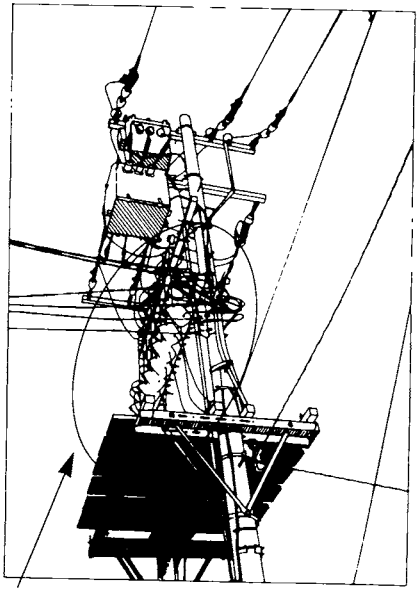
引込線と電線管
（強い電磁波発生）

A部アップ

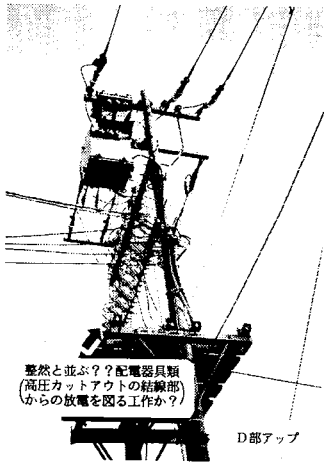
北海道北広島市

西部中学校横

D部からの放電工作によりS波照射時→植え込みがS波を吸収・滞留・放出→次のアンテナに搬送→学校を汚染

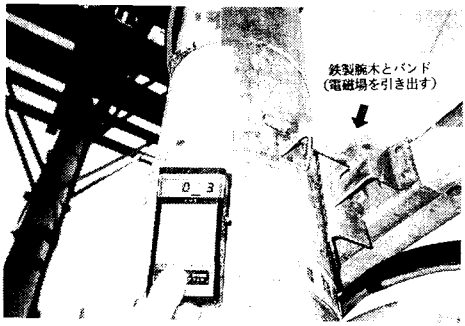


整然と並ぶ？？配電器具類
(高圧カットアウトの結線部からの放電を図る工作か？)



D部アップ

鉄製腕木とバンド
(電磁場を引き出す)



電磁場測定値

地上0m……0.2ミリガウス
1m……0.6　〃
1.5m…… 3.0　〃
2m……7.3　〃

(中学校横でこれですから、中学生の犯罪、教室崩壊を演出するのは非常に簡単！　S波攻撃と工作からの漏電で、マインド・コントロール策戦でしょう！　千乃)

神奈川県藤沢市

藤沢バイパス周辺の報告

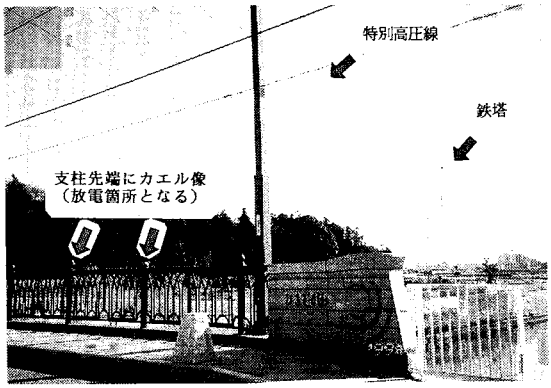
藤沢バイパスは、国道一号線（横浜方面）から湘南地区へ向かう道路で、夏は湘南海岸を目指す東京方面からの人手で大渋滞となる幹線道路です。この度一九九八年二月号で記載しました「藤沢警察」から下り方向を調査しましたので報告します。

この場所は十ミリガウスを越える所が多くあり、特に集客設備の近辺が高い値を示しています。Mバーガー前の電柱では、測定範囲（五一一ミリガウス）をオーバーし驚きました!!

また、藤沢バイパスの南北を流れる「引地川」周辺は、公園や遊歩道が多くあり、橋及び道路を測定したところ、三十ミリガウス以上の場所が二ヶ所あり、優雅に散歩する雰囲気ではありませんでした。

（神奈川県　中山春巳）

①藤沢市大庭天神橋付近



特別高圧線

鉄塔

支柱先端にカエル像
（放電箇所となる）

鉄塔

コンクリートブロック
（S波吸収→滞留→放出）

引地川

電磁場測定値

地上約1.1m……22.6ミリガウス

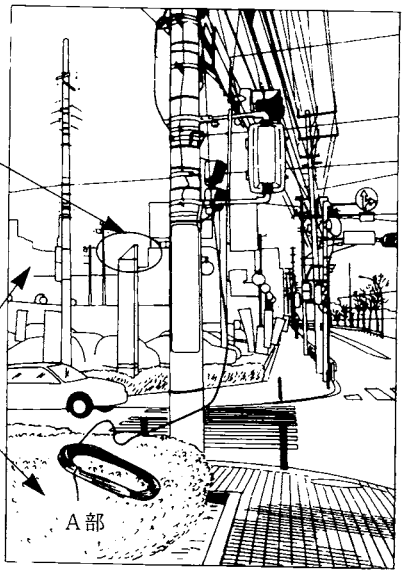
（高圧線の斜め真下では34ミリガウスもある。すぐ近くに大庭遊水公園があり、家族連れで賑わっています。）（人が大勢来る所は、必ず測定値が高いです！　万遍なく行き渡るように。あるいは特定の人物の暗殺が何処へ逃げても成功するようにとの配慮か—？　千乃）

②藤沢市太平台富士見橋付近

高圧配電線とスペーサ
(放電工作)

引地川

電磁場測定値（橋の中央部）
地上0m……10.2ミリガウス！
0.5m…… 12.0 〃 ！
1m …… 12.7 〃 ！
1.5m……13.0 〃 ！
(350m先に藤沢警察署!!があります。)



植込みに放置した通信線
電磁場測定値（電柱No.中井26）
地上0m……8.2ミリガウス
0.5m…… 9.5 〃
1m …… 10.5 〃
1.5m……11.3 〃
(左側100m位に湘南太平台病院と長久保公園があります。)（ちゃんとゲリラは判っているんです。人の多い所にはS波発生を増やす仕掛けを―。千乃）

植込みに放置している多重巻の通信線!!!
(S波吸収→滞留→放出)

A部アップ

キャラバンで起こる 幻聴・幻視のメカニズムを解明する

る人の全身の温度分布が読みとれることになります。恐ろしいことに、追跡者の健康状態や身体や臓器の欠点までも浮き彫りにされてしまうのです。また、このミリ波なら自然界が大量に発生させているので、少々発生させても誰が何の目的で発生させたのか分からないと思います。

最後に、この脳内言語とミリ波に、加えてスカラー波によるマインド・コントロールの戦略を考えてみましょう。実例ですが、集いの方によれば、人工スカラー波攻撃だと思い綿布を頭から被っていたとのこと。ふと外を見ると、ご自宅の側に不審な車が止まっており、そのなかのモニターに御自身が映し出されていたとの証言があります。これから推測すると、ミリ波に脳内言語で書かれたマイコン用の人工スカラー波を載せて、個人に照射する。攻撃を受けた人は、脳内言語が皮膚から脳に伝えられ、感覚器官を通過することなく、脳にマイコンの情報が転写される。次に、攻撃を受けた人がどのような体調になり、どのような行動をとるかを、精神分析医と共にミリ波モニターで監視し、そのパターンをコンピューターに記憶させる。このような実験を繰り返しながら、攻撃対象者の身体的な苦楽と行動パターンの辞書ができあがり、後は脳内言語で簡単にプログラミングして、人を操るのです。計算外の行動をしたときには、痛みや恐怖を。計算通りの行動をしたときには、体を楽にすることで、攻撃対象者に条件反射を埋め込んでしまう。そしてどうしてもマイコンが効かないときには、人工スカラー波の殺傷能力が物を言うのです。

注意していただきたいのは、ミリ波だけでは現在地球に起きている環境破壊を説明することはできないということです。マインド・コントロールの攻撃を正しく理解するには、スカラー波のことを念頭に置いて、本文を読めば理解して頂けると思います。

ある隊員はキャラバン参加の最中、変な音楽や北朝鮮ないしは朝鮮総連の幹部の行なっているような演説が聞こえた。またある人は走行中、実際は右曲がりであるはずの道路が左曲がりに見えた（――一歩間違えば交通事故に繋がる）。あるいはある隊員は鬼の顔や黒人の姿が見えたという。こういう人工的に起される幻聴や幻視の現象のメカニズムを簡単に説明したい。

A. 幻聴について

一、聴覚……まず音はどのようにして聞こえるかということから説明したい。

自然の状態の聴覚は二種で、空気伝導と骨伝導である。

空気伝導――図のように、音波（空気の振動）は外耳道を通って中耳に至り、鼓膜がその振動を内耳に伝える。内耳の器官である蝸牛（かぎゅう）はこの振動を神経の興奮に転換し、蝸牛神経がその興奮を中枢に伝える。そして最後に大脳視覚領に伝導され、そこで音響として認知される。

外耳＞中耳＞内耳＞脳

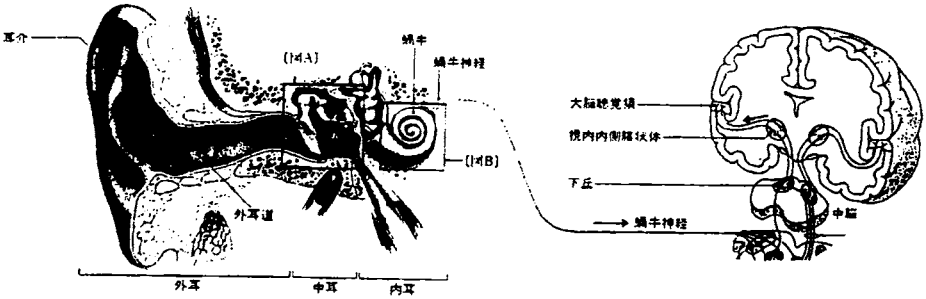
骨伝導――空気の振動が頭蓋骨を経て直接内耳に伝えられる。以下は空気伝導と同じ。

体の部分＞頭蓋骨＞内耳＞脳

ここで記憶すべきことは、内耳の蝸牛器官内の聴細胞の働きにより、音が神経の興奮（神経の電気パルス）に転換され、脳に伝達され、脳がその電気パルスを解読するということである。言語の場合も同様に、その音（音声）は内耳で電気パルスに転換され、脳がその電気パルスを翻訳解読して言語として認知する。

二、人工的に起される聴覚

今日人工的に聴覚を起こすことのできる機器や兵器が開発されているが、それを可能にする聴覚の種類とその代表的な機器、兵器の種類として次のよう



なものがある。

（1）骨伝導……インフラサウンド・マシン

（2）真皮伝導……ニューロホン

（3）神経パルス直接伝達……ＥＭＲマインド・マシン（電磁気照射思考検出兵器、ＴＲＭ）

（1）インフラサンド・マシン

八〇年後半頃にソ連のモスクワ医学アカデミーのサイコ・コレクション（精神修正）部門で開発された。九一年ジャネット・モリスがソ連を訪れた際に視察し、米国に紹介している。低周波のインフラサウンドに潜在意識メッセージを乗せ、ターゲットに照射し、マインド・コントロールや行動修正を行なうというものである。骨伝導であるため、身体全部を覆う防御装置を身に付けない限り防御は不可能。効果は即効。

注：このメッセージは一般の音声（音波）である。

体の部分＞頭蓋骨＞内耳＞脳

マインド・コントロールやノンリーサル兵器として実用される。

（2）ニューロホン

フラナガン博士の発明。オリジナル機は五八年に発明され、七八年頃に完成品ができている。原理はラジオ波を皮膚に当て、皮膚から直接脳に伝導させる。真皮伝導のメカニズムは長い間明らかにされていなかったが、この音伝導方法は存在する。

博士は人間の蝸牛器官が行なう機能と同じような働きをするサーキットを発明し、オリジナル機に装着し改良した。蝸牛器官は音を神経シグナルに転換するが、このサーキットはそのシグナルを電気的なアナログの形に置き換える。被験者の皮膚にワイヤー付きのセラミック・ディスクを取り付け、最高五〇ボルトのスクエア波にこのシグナルを乗せて伝導する。皮膚上には小さな電場が生じ振動をし、それが皮膚伝導で脳に伝えられる。

注：この機器ではもはや音波や耳（外耳、中耳、内耳、聴神経）は無用となり、電気パルスが皮膚から直接脳に伝達される。

皮膚＞脳

市販される。兵器にはならない。

（3）ＥＭＲマインドマシン

知られる機器の中で最も効果的、実用的なもの。不可視の電磁波の照射で遠隔からターゲットに当て、幻聴・幻視や思考リーディング等様々な効果を上げる事ができるため最も悪用され、最も恐れられている兵器。キャラバン隊員が受けるのはこの種の兵器の攻撃であろう。伝達したい言語、音等をコンピューターに通して電気パル

スに転換し、これをＥＭＲ照射で直接ターゲットの脳に伝達する。あるいは逆にターゲットの頭から発生する脳波を拾い、コンピューターＣＰＵに通してターゲットの頭の中では、どういう言葉が思考されているかを検出する。

オリジナル機は一九七三年頃にＣＩＡによって発明された。ヒントはある病院の発明機械で、患者の脳の一部に、ある種の電磁波を当てると睡眠を起こすことができるというものである。電磁波が生体に及ぼす影響についてはソ連でも研究がなされていたが、その後改良が重ねられ、今日のようにエミッター（照射機）にコンピューター、遠隔操作機、レーダー、リモート・ビュー等の周辺機器が揃った兵器に進化した。

プロセスは簡単で、音波を電気パルスに転換する蝸牛器官と同じ働きをする装置をコンピューターに内蔵させ、蝸牛器官が出す神経シグナルに相当する電気パルスを発生させる。さらに、思考検出に関しては、言葉に対応する脳波と思考に対応する脳波は同じものであるという原理を応用する。つまりある言葉を声に出して言う場合と黙してその同じ言葉を心の中で思考する場合は出る脳波は同じである。

例えば「猫」という言葉を口で言う際の脳波と、黙って「猫」と頭で考える場合の脳波は同様。

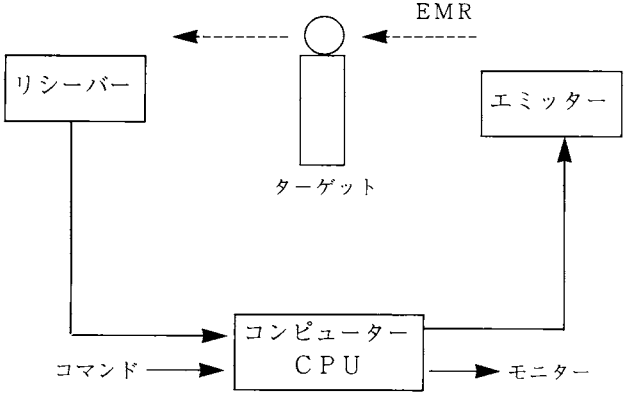
言葉＝思考＝脳波

猫＝猫＝脳内の同じ脳波

この理論を応用し、被験者の頭に脳波検出装置を乗せ、様々な言葉に対応する脳波を検出し収集する。この作業を繰り返し、コンピューターのＣＰＵに辞書を創る。

ターゲットを攻撃する（音声を伝達する、あるいは思考を検出する）際は、図のようにコンピューターに連結したエミッター（ＥＭＲ照射機）とリシーバー（脳波収集機）を設置する。

ターゲットに聞かせたい言葉、音をコンピューターに通し、電気パルスに転換する。それをエミッターからタ



ーゲットに向け照射する。ターゲットの脳はそのパルスを受け取り、脳内で翻訳し、結果として音が聞こえる。この際も耳の機能は全く関係なく、ターゲットの脳の中で音声がするということになる。防御の方法がないので、いやでも「聞かさせる」ことになる。

また逆にエミッターから電磁波をターゲットに向け照射し、脳波をその電磁波に乗せてリシーバーで収集する。これをコンピューターに送り、言語に翻訳させる。コンピューター・モニターにはターゲットの思考が言葉として表示される。

聞かせたい音等を録音テープから転換したり、またコンピューター接続マイクの前でしゃべってリアルタイムで音声をターゲットの脳に送ることもできる。

注：＊この攻撃は無音（音波でないため）、不可視である。

＊脳内への直接脳波伝達であるため、脳内で中から外に向かうように音声がする。またターゲット以外の人間は近くにいても聞こえない。

＊遠隔操作で操作できる（機器をセットすれば遠方から攻撃できる）。ＥＭＲはコンクリート、壁、石、大抵の金属を通過できるため、建物や車内にいるターゲットを外部から攻撃でき、またオペレーターが建物や車両の内部に潜んで行なうことも可能。

＊伝達される音声はそれを話した人の声の特徴をそのまま残しているため、他人の声色である。いくら自分の頭（心）の中で言葉が聞こえて来ても、自分の声と他人の声の区別はつくので、マインドマシンの攻撃であると判断できる。精神分裂症も幻聴の症状がでるが、この点が精神病と大きく違うところである。

B. 幻視について

幻視を起こすにも様々な方法があるが、ここでは薬品類（ＬＳＤ等）を投与したり電波を頭部に照射して意味のないサイケディックな幻覚を起こすというものではなく、意図的に明確な映像をターゲットの脳に転写する方法を簡単に説明する。現在右記のＥＭＲマインドマシンが最も有効なマシンとして使用されている。原理は幻聴の場合と全く同じである。

可視光線の刺激によって起こる感覚を視覚というが、脳は目から入ってくる情報に対して脳波を発生させる。視覚に対する脳波は言語の脳波とは違う。つまり「猫」という言葉を言う場合の脳波と実物の猫を見た場合の脳波はかなり違い、ビジュアル情報に関してはもっと複雑な脳活動となる。だがプロセスは同じで、被験者の頭部に脳波収集の装置を被せ、様々な絵や写真等を見せ、それにより発

生する脳波を検出する。この作業を繰り返し、コンピューターにビジュアル情報に対応する脳波の辞書を作る。

ターゲットを攻撃（幻視を見せる）する際は、まず見せたいと思う絵や写真を用意し、コンピューターに通し、脳波に転換する。それをエミッターでターゲットに照射する。ターゲットの脳内の視覚領はその脳波を受け取り、映像として認知する。また逆にターゲットの脳波を収集し、コンピューターに通し、ターゲットの視野に何があるか知ることができる。

キャラバン隊員が車で走行中、右曲がりの道路が突然左曲がりに見えたという状況を作り出すためには、まず左曲がりの道路の写真か絵を一枚用意する。コンピューターに通し脳波に転換。レーダーでキャラバンの進行を追跡し、リモート・ビューでその隊員の正確な位置を確認する。或いはその隊員の脳波を拾い、彼の視野に何があるかを検出する。道路の曲がり角にさしかかった時にすかさずEMRエミッターでその隊員に送る。

注：＊送られて来た映像の元は絵ないし写真であるため、じっくり観察すると全く動かない。これが判断の決め手になる。

＊ターゲットが睡眠中に、色々な映像を脳内にフアックスし夢を見させることもある。また送られて来た映像に対し、どのような身体的および心理的反応が現れるかをみて、ターゲットの性格や健康等を調べるのに使われることもある。

ミリメーター波とマインド・コントロール

アラン・ユー

読者の皆さんへ

ハイテクのリモート・ビュー・テクノロジーが使用されることにより、マインド・コントロール・サーベイランス・システムの下では、身を隠す場所はどこにもないという事実を以前にお伝えしまし

私の命は貴方に委ねられています！

原題：My life depends on you!

手遅れになる前に、私を含め我々全ての人の命を守るために行なう公開の訴え

＊ウイニペグ、一九八二年：カナダ政府の省はアメリカ空軍と共同で、生物学戦争の「実験」を行ない、ウイニペグ市全体に毒性物質を空中散布した。

＊モントリオール、一九五八年：マクギル大学の医師達は、ＬＳＤを使用したＣＩＡの実験で、自分達の患者を知られずに「モルモット」として利用した。一九七九年トロント、ＲＣＭＰ（Royal Canadian Mounted Police、英国皇室直轄カナダ騎馬警察）は政治活動家のロス・ドウソンの医学記録を偽造することを是認した。警察当局は、ドウソンの信奉者に彼の人格は疑わしいと思わせるために、彼には精神不安定症状があるという偽レポートを公開した。

マーティー・コスキー、現在：カナダ在住のフィンランド移民で、マイクロウェーブを使用したマインド・コントロールや「テレパシー・テロリズム」の奇妙な実験の「モルモット」として、ＲＣＭＰのターゲットになっていた。

近年、政府（複数）が行なっている広範な「ダーティ・トリック（汚い策略）」の数例のケースが浮上して来ているが、これらは氷山の一角である。我々が得たケースのリストは、我々に知られているものだけであるので有限であり、我々に知られていないものこそが問題の中核であろう。マーティ・コスキーの話しが明らかになるにつれ、我々が知らなかったことは、我々の心を痛めるものであることが判る。

＊＊五人のカナダ人が、一九五〇年代の実験に対しＣＩＡを相手に訴訟を起こす。

バンクーバー（ＣＰ）：ロバート・ロジー氏は、自分はアメリカ情報局（ＣＩＡ）のモルモットにされ、病院で幻覚発生や大量の電気ショックが含まれる洗脳実験を受け、その悪夢が現在も蘇ると語

っている。彼と他の四名のカナダ人は今週ワシントンにおいて、アメリカ政府を相手取り、五百万ドルの損害賠償を求める訴訟を起した。彼らの訴えによると、CIAは予算数百万ドルのリサーチを施行し、患者に薬品を投与し行動変化をみるという実験を行なったが、それにより被った損傷に対し、一人当たり百万ドルの賠償を求めるというものである。四二才の独身、隠遁生活者のロジーは、インタビューで、自分は五〇年代モントリオール病院でLSD実験の被験者にされたことを訴えているのだと語った。彼はMKULTRA、サブプロジェクト68と呼ばれるCIAの薬物実験の「モルモット」であったという。これは尋問、行動コントロールや洗脳をテストする一連のCIA・スポンサーの計画実験であった。彼はまた、CIAはマインド・コントロール実験を実施するために最低六万ドルをキャメロンに支払い、別途に心理学学部助成金として三万五千ドルがマクギルに渡った、と述べた。また「ヒューマン・エコロジー調査会」という名のアメリカの省がこのCIAのプログラムの前哨組織であったという。

彼は六八年に当地にたどり着いたが、その時自分は誰で、どこに居るのかも判らなかったという。彼は警察に行く前の五日間橋の下で寝た。バンクーバーの親類が、新聞に載った彼の写真を見て身元を確認した。「自分の健忘症はLSD実験に関係しているか判りませんが、判っていることは悪夢が途切れることなく、今も続いていることです。」と彼は言う。

〔コスキーのパンフレット〕

皆さん

私が皆さんにお話ししようとしている事柄は奇妙に聞こえると思います。内容はRCMPの極秘テストで、人間のマインドや身体をコントロールする目的のマイクロウェーブで作動するテレパシー増幅機、音声の幻聴、スパイ学校、尋問、有毒ガスなどが含まれるため、気違いじみていると取られると思います。

第一印象から、私は悲しくも現実との接点をなくした物語の中の「クーク」と同じような奴だと顔を背けるのではないかと思います。もし私がこの「実験」の犠牲者にされなければ、たぶん私自身も同じように反応すると思います。どうかそのように受け取らないで下さい。数分の時間を割いて、このパンフレットに目を通して下さい。そして私達の社会に根差し、私達の信念や信頼を試している他の衆知の問題を考えてみて下さい。それと私が語る事柄を考え合わせ、善意に解釈して下さるよう御願い致します。私が伝えなくてはならないと思っている事に、僅かでも真理があると心に響くものがあれば、自分は関係ないと通り過ぎることはできないでしょう。

私の話しは、安物の空想科学スパイ・スリラーものの筋書きのように聞こえると思います。が、この問題は実際に私の人生に起きたのです。そしてこの人間の尊厳を踏みにじる行為を暴き、反撃する戦いに参加しなければ、次は貴方の上に起こるかも知れないのです。私はこの恐ろしいプログラムの最初の被害者の一人ですが、貴方方の援助がなければ、犠牲者は後を断たないと確信します。

マーティ・コスキー

一九八八年一月、オタワ

*コスキーのストーリー

当初私は自分は少しずつ頭がおかしくなっていると思ってました。「ボイス」がするのは正常であるとは思っていませんでしたが、私の場合、一日二、三時間ボイスが聞こえていました。ボイスは階上の家から天井を通して来ているような感じでした。しかし、ほとんど気にしていませんでした。私には有る種の神経系の機能障害があり、そのせいだと自分に言い聞かせていました。この病気は完治は無理ですが、生活には支障はありません。この「話し声」は四年間ありましたが、その後七九年夏の後半頃突然ひどく悪化しました。身体の正常な機能と感情のコントロールがほとんどつかなくなったようになりました。まるで誰か或いは何かが私の睡眠、臭覚や味覚の感覚をコントロールしているようでした。食べ物の味が変わり、ひどく塩辛かったり酸っぱい味がするようになりました。セックス機能、排尿、排便やその他の基本的な新陳代謝が全て影響を受けました。

ついには仕事さえも出来なくなりました。私は溶接工でしたが、空気はみな二酸化炭素で汚染されているようで、呼吸も出来なくなりました。そのため口内にひどく涎や泡が出ました。その時点では「ボイス」は一日二四時間し、寝ている時以外はいつも話しが聞こえました。一日約一時間程の最低限の睡眠しか取ることが出来ず、アパートを一歩出ると途端にめちゃくちゃ眠気がし、家に入ると今度は眠れないのです。心臓の鼓動は不規則になり、終いにはコントロールがつかなくなり、七九年十二月に「心臓発作」患者としてエドモントンのアルバート大学病院に入院させられました。普通の肉体的及び精神学的な病症があったというより、もっと変なことの犠牲者にされていると最初に疑いを抱き始めたのがこの病院です。その時初めて「ボイス」は自分に何者か明かしました。声はＲＣＭＰのスポークスマンで、わたしはスパイとして「訓練」するために選ばれたと告げました。私の訓練の最初のものは、ロシアの精神病院で生き延びる方法を習得することで、この病院は練習場なのだと言いました。

私はその病院に三日間入院し、たくさんの奇怪な実験を受け、奇妙なことを体験させられました。例えば薬を与えられましたが、同時に「ボイス」は毒薬だから飲むなと警告しました。それを飲むと苦しい心臓動悸が始まりました。また、ある部屋に行ってはいけないと警告されていましたが、後で一人の「医師」の誘いに釣られてその部屋について行くと、尋問及び性機能と生殖器の暴力的「テスト」をされました。病院にいる間中、性的及び生殖器の「実験」が何度も行なわれました。また、入院中、私が眠ろうとする度に邪魔をするかのように酷い頭痛に見舞われ、そのため一睡も出来ませんでした。退院してアパートに戻って来てからも、相変わらず呼吸困難と酷い頭痛がしました。

私をどこまでも追いかけて来て離さないこのトラブルから逃れたいと思い、家を離れる決心をしました。アパートを出て一〇日間安ホテルに宿泊しましたが、やっぱりだめでした。睡眠はいつものように妨げられ、尿意や拝尿の能力がなくなったように二度もヘルニアになってしまいました。私は再び病院に助けを求めましたが、またしても最初の時と同じ、相変わらず私が以前「訓練中」であった「スパイ学校」なのです。今回の「訓練」は、シャツを盗む事と一種の闇市に行って、タバコと交換で他の患者（囚人）に何かしてもらうということでした。初めて見たのですが、何人かの医師や患者達が参加して、ロシアの精神病院そのものの様相にするため演技をしているのです。記憶している一人の医師はピーター・ヘイズ博士という名でした。

私はアパートに戻りましたが、その直後のある朝、電話で起こされました。取って返事をするや電話は切れてしまいました。その途端十五秒間部屋にガスが充満し、口中に血が溢れてきました。そして「ボイス」がこれが最後の警告だと告げました。

これでは気が狂ってしまうし、命も危うくなると恐れを抱き、生まれ故郷のフィンランドに帰国することにしました。が、このことで私の生活に介入し、やりたい放題に弄んでいるのはＲＣＭＰだと以前にも増して確信するようになりました。カナダを出るにはパスポートが必要で、私はそれを探しましたが、見つけることができませんでした。どこかに仕舞い忘れたようです。さしあたり新しいパスポートが申請できるトロントに出向き、そこから出国する決心をしました。

私はグレイハウンド・バスでトロントに向かいましたが、その旅行の間も「ボイス」は追いかけて来るのです。バス旅行中、ＲＣＭＰのマークの付いた車が何時間もバスの後を尾行してくるのに気が付きました。また、バスは何回もＲＣＭＰの車と出会い、ＲＣＭＰの職員と思しき人間が車から降りて、バスに乗り込んで来たことも

ありました。このバス旅行中、私が実験台にされているのはどんな種類のものであるか知る最初のヒントが得られました。「ボイス」は私を「マイクロウェーブ・マン」と呼び始めたのです。その間ずっと「スパイ訓練」エクササイズは続行していました。その他に、どの食べ物は食べてよい、あるいはどれは食べると危険だということを教えられました。食べるなと禁じられている食物を取ると、ひどい胸やけや発熱が起きました。また「ボイス」は私のクレジットカードの支払い上限額は無制限にしてやってあるから、クレジットカードでの買い物は心配する必要はないと言いました。私は最初の「宿題」を出されました（トロント市の全人口を調べ、男女別の人口数も出すというもの）。「ボイス」はフィンランド語を話す女性の声に代わりました。フィンランドにいても状況はカナダとさしたる違いはなく、「ボイス」は纏わりついて離れません。ただ違うことは今度は「ボイス」は自分たちはシリウス星から来た存在だと自称し始めたことです。フィンランドに滞在した二ヵ月半の間、実験とボイスは相変わらずでした。母はついに政府に助けを求めたらどうかと言い出しました。彼女は私が出発する直前に、荷物の中に私には必要のない処方箋薬品を忍び込ませたと告白しましたが、また「心臓発作」を起こさせる計画だったのでしょうか？

船、汽車、飛行機を乗り継いでカナダへの帰国は五日間の旅程でしたが、その間私は一睡も許されませんでした。エドモントンに帰宅するや、奇妙なことが束になって次々と起こりました。まず最初、前のパスポートが台所のテーブルの上に置いてありました。次に何種類かの有毒ガスの実験材料にされました。また、アパートの別のテナントはＲＣＭＰのエージェントであるらしく、彼らの実験に警察が協力しているようにも見えました。

この綿密で拷問のような実験には催眠術や特殊な社会効果を狙ったものも含まれ、消防車を動員し私の周囲をぐるぐる走り回らせるというのがありました。その時は、アメリカ社会の問題は「癌」で、癌が私たちを脅かしているという批評説を私の頭に叩き込むという教化プログラムが課されました。私はこの「癌」に「汚染され」て「クリーンでない」と教えこまれました。消防車はこの汚物を大掛かりに洗い流してきれいにするためのものだと言うのです。

ここまで来ると、このめちゃくちゃな身体的及び精神的な攻撃に対する私の忍耐力も限界に達しました。私は反撃に転ずる機会が到来するのを待ちました。四月初め、日々暖かくなり見えないマイクロウェーブのパワーが弱まってきているのに気が付きました。太陽の日を浴びて、草の上で眠ることが出来ました。この睡眠、ここ数ヵ月の間で最初の熟睡ですが、御蔭で私を攻撃しているものに対する抵抗の意志が回復し蘇り始めました。私が抵抗を始めるや否や、

実験は徐々に納まり始めました。フィンランド語の「ボイス」はまだしていますが、その強度はずっと弱まりました。彼等はこの段階を「保護期間」と呼んでいます。しかし、依然として健康や生命への脅えはあります（この時点で「ボイス」は、私は五年以内に「自然死」を遂げる運命にあると告げました）。そして全カナダ社会に待ち受けていることに対する私の危惧はなくなっていません。

＊何故私が？

何故私が被験者として選ばれたのでしょうか？　私には何か特別なものがあって、それでこの攻撃のために選抜されたのでしょうか？　あるいは単に出会い頭にやったのでしょうか？　答えは「イエスでありノーです」。

私は独身で、カナダにいるたった一人の縁者は数千マイルも離れた所に住んで居ます。私は宗教団体にも組合にも政治団体にも属していません。私は英会話が不得意なので、他のカナダ人とのコミュニケーションが困難です。手短に言うと理想的なターゲットです。私は友人や知人の大きな輪を持っていませんし、新しい人と知り合ったり親友を作ったりという能力には限界があります。その上に実験準備期間（私のケースは四年）は、ターゲットに奇妙な行動をとらせたり気力を削いだりして、孤立させ、それ以上友人や知己を増やさないようにもっていくように計画されているものなのです。

＊反撃

何が何でも、我が身に起きたことを世の中に露見させねばと、チラシを作り、エドモントン中の電信柱や建築工事現場の塀に貼って回りました。チラシには、ＲＣＭＰは私をマイクロウェーブ作動の一種のテレパシー増幅機実験の被害者にしているという非難文を載せました。また、そのような実験の虜になっていると思われる人がいましたら、連絡を下さいと書きました。すると何人かから返事がありました。私は一人ではなかったのです。私にコンタクトしてきた人の半数は、刑務所で実験材料にされたと語りました。もっと多くの人々の反応を知りたいと思い、日刊の新聞に投稿しましたが、掲載してくれるところはありませんでした（後日、エドモントン・サン紙は、私の告発を否定し、信憑性のないものとする「ニュース」を載せました）。八〇年五月、出来事全体を陳述した四ページの手紙を書き、フィンランド大使館に送りましたが、未だに受け取ったという連絡さえありません。市警察やアルバータ州人権団体やアルバータ州保安委員会などの政府機関に依頼をしましたが、どこも調査をしようというところはありませんでした。

アルバータ州人権団体は、この件には人種偏見がからんでいるの

で手に負い兼ねると報告してきました。アルバータ州保安委員会の方が、最初私の訴状を紛失したと言っていましたが、その後二ヵ月間数回足を運んで、やっと職員のR・スミス氏から「出来ることを検討します」という約束を取り付けました。が、翌日RCMPの人間G・A・フォーブスが私の家に来て、「調査」を開始するに当たり、私の病院記録カルテを取り寄せる許可を本人から頂きたいと言いました。その記録は、私も見せてもらえなかったものです。私はいいですと許可したので、フォーブスはそれを読んだはずです。ともかく彼は再度私にコンタクトし、詳しい調査をする予定ですと言いましたが、その後彼は何も言って来ません。八〇年七月と八月、私は公衆に向け、もっと暴露を行なおうと、今までになく強く決心し、ここに記述していることも包合した五ページのパンフレットを作り、一万六千部をエドモントン中に配布しました。再び私と同じような状況で被害者にされていると主張する何人かの人から連絡がありました。しかし、マスコミや政府機関からは皆無です。

無論、政府閣僚にも手紙を送りましたが、なしの飛礫です。同年十二月初め、私は首都オタワにやって来ました。ここは私の「終着駅」です。私は僅な貯えを全てはたき、人々の視線をこの問題に向けさせるための最後の試みを行なおうとして当地にやって来たのです。皆さんが今お読みになっているこのパンフレットが、私に出来る最後のものなのです。今の所持金はフィンランドに戻る旅費だけです。

＊なぜ皆沈黙しているのか

なぜ誰も、突っ込んだ調査が急務とされるこの問題に耳を貸さず、関心も持たないのでしょうか？　この質問の答えの大部分は、事件が起きたことを知り、それをどう認識するかということについては、我々は大手マスコミに頼りきりということなのです。

テレビに出、ラジオで放送され、新聞に載るから、それが起きているのであって、もしマスコミに出なければ、何も起きていないことになるのです。私の話を報道不許可にしたのは検閲制度（実際に存在します）ですが、これは政府が自分達の倫理に反する非合法の活動を擁護したり、隠蔽したりするための防衛の最初の砦なのです。

最近の検閲の例ですが、十二月三〇日、オタワAMラジオ・ステーションは、アメリカには、認可なしに国民七万人を不妊化していたプログラムが存在していたことを報道するニュースを放送しました。そのニュース・レポートによると、その内バージニア州に住む七千人が、政府を相手取り訴訟を起こしたという。情報源はバージニア州市民権協会であるということです。その日同じステーションで三回ニュースの度にその報道を聞きました。オタワの他のラジオ

とテレビの放送局もモニターしましたが、そのことのニュースは一度も放送されませんでした。その上にオタワの日刊新聞はその記事はなにも載せませんでした。報道の自由というのは、権力者が載せたくないと思っているものは、報道しない自由ということなのです。

報道不許可テクニックには二重の効果があります。まず第一に、私のような被害者を孤立させ、同じことを経験している他の人と接触するのを妨げること。第二に、例えば私がやったようにビラやパンフレットで情報を公開しても、そのようなことを公道で叫ぶ人間は社会の枠からはみ出してしまった連中で、「奇人」「クレージー」な族だと見做されることです。第二の要素は、私の告発のように、性質上奇怪で恐怖を催すものであるため、調査の道を遮断する大きな理由になります。マイクロウェーブのテレパシー・テロなど、本当に起きているとは誰も信じたくないです。

私のビラかパンフレットを読んで憤ったある人が、RCMPに抗議の電話をかけたところ、警察が真っ先に使う常套手段として、気の毒そうな口調で、「あの人は精神病患者なのです」と説明されたということです。ビラはさっさと破いて、忘れてしまいなさいと電話口でアドバイスされたそうです（勿論、彼らには次のような質問をするのが理論的と言うものです：RCMPは私が精神病であることを知っているのですから、どうして私を精神病院に委託収監させる手続きをしないのでしょうか？　私の話しが偽りであるとしたら、どうして私を訴えて提訴しないのでしょうか？　そういう行動を取らないで、わたしを市囲に野放し状態に放置し、情報を流し続けさせ、そうでなくとも汚れた彼等のイメージを傷つけるに任せているのは、何故なのでしょうか？）。

さらに、この事件の微妙で不安定な性格にかてて加えて、普通実験の被害者は自分に何が起きているのか理解が出来ないというのが現実なのです。またしばしば実験によって記憶消失やショックが生じて、理性的にまた理論的に出来事の順を追って話す事が非常に困難で、時にはほとんど不可能になります。そして再度言いますが、警察当局の悪意の行為が効果を上げているというよりも、一般人には、被害者達は特殊な精神異常を患っているのだと考える方がずっと楽なのです。こういった事柄全てを考慮に入れても、あまりにびっくりする内容なので、誰もが耳を貸さず無視して通り過ぎて行ってしまうのでしょうか？

＊この道はいつか来た道

RCMPが手を染めるマイクロウェーブのマインド・コントロール：使用される装置は長距離モード、睡眠及び心拍コントロールのファンクションがあり、被害者は無気力状態と精神的な死の状態に

置かれる。遥か遠くの宇宙からの声或いは神の声が聞こえる（私の場合、決してＣＩＡではありませんが、霊能者なので、旧ＫＧＢ、民医連、左翼ゲリラから、更に悪質な干渉と介入があります。つまり千乃のリビドー発生に関しては、千乃の高年齢もあって、〃一〇〇％ノーリビドー〃なので諦めて、他のキャラバン参加者にその手の実験をするということです。そして、その疑いが総て千乃に向くようにする――。昭和一桁はそんなに安易にリビドー妄想など湧きません。新人類は特殊なタイプ。フロイト理論そのものが、リビドーを全生活に導入するので、反ってそういった事ばかり考えるようになり、その為にリビドーやその関連の妄想を抑えることが出来ないように思えます!!　千乃）、誠に奇妙で信じがたい。本当かも知れないし、そうでないかも知れない。このようなことは過去にもあったような……。何も疑ってもいない普通の人を知らない内に、本人の意志とは無関係に「モルモット」にすることは、過去にも繰り返されています。

＊第二次世界大戦後の初期の実験

衆知のことですが、日本[*]はバクテリア細菌学実験のモルモットにアメリカ兵を使用した。しかし、戦後アメリカ軍は、アメリカ兵の戦争捕虜で実験したことで日本を責め告訴することをしなかった。日本[*]はこの残忍な人体実験で得た情報を残らずアメリカに分与したからである。言い変えるとアメリカ軍は自軍兵士の生きる権利を殺人者に売り渡し、多くの場合、不運なアメリカ兵士の生命を奪うこととなった生体人体実験に利用させたのである（信じられないです。七三一部隊についてなら一〇〇％の中傷デマですから。千乃）。

（一）第二次大戦時[*]にアメリカ兵戦争捕虜を殺した日本の科学者の大部分は（＊日本に関して情けないことに、又もや根拠のないウソがまかり通っています!!　千乃）、戦後の五〇年代初期、アメリカがスポンサーの研究のために働いた。この時の犠牲者は日本人の児童、囚人、精神病者であった。主な実験は別種のバクテリア研究と凍傷実験であり、その例として実験被害者は強制的に四肢を冷水の中に浸けさせられ、そのまま凍って固くなるまでじっとしていることを強要された。

（二）アメリカは独自でもバクテリア細菌学実験を施行した。致死を起こす可能性のあるバクテリアをニューヨークの地下鉄でばらまいたのを始め、他の六ヵ所の都市でも空中散布した。この実験で死亡した人の正確な数は不明である。

（三）アメリカ軍の非合法の実験の内、僅かな例のみが漏洩しているが、それは巨大な実験全体像からすれば正に氷山の一角で、全体は依然秘密裡に置かれている。医学倫理歴史の教書さえも、これら

の実験を記載漏れにしているのであるから、医学倫理が告発する違法人体実験の氷山の僅かな一角は、過大評価してもし過ぎることはない。

＊ＣＩＡとマインド・コントロール実験

ＣＩＡは第二次世界大戦終結後の一九四九年から人間の心をコントロールする研究を開始している。初期のリサーチは、自白剤を発見することと催眠術の使用が中心であった。実験の犠牲者は主にスパイや二重スパイの嫌疑を受けた人であった。自白剤になりそうな作用を持った化学薬品の一種がＬＳＤであった。ＬＳＤに興味を抱いた何人かの科学者は少量自らに試してみて、それからボランティアの囚人を使ったテストへと進展させた。これらの実験にボランティアで参加した囚人のほとんどはヘロイン中毒患者で、奉仕の報酬として、彼らが欲しがっているヘロインが一定量与えられた。

囚人は別として、実験はボランティアの大学や短大の学生、精神病患者、ＣＩＡが無作為に選んだ一般のアメリカ市民、また金で雇われた売春婦等を使って行なわれるようになった。裏側から見える鏡と盗聴器を備え付けた特殊な部屋を使い、気付かれないようにＬＳＤを投与し、人間の行動がどのように変わるかモニターすることも行なわれた。ＣＩＡは、当人に知られないようにＬＳＤを投与し、町医者にこれらの人々は明らかに「精神異常」であると診断させる、ということもしばしば行なわれた。ＬＳＤ予言者のティモシー・リアリーは、ＣＩＡのマインド・コントロール実験でボランティアをしたことから、ＬＳＤの最初の知識を得た。ジョン・マークスは自著の『ＣＩＡマインド・コントロール』の中で、ＣＩＡのマインド・コントロール・プロジェクトから流れたＬＳＤや毒キノコが、ボランティアの学生やヒッピーやホモの裏文化へと渡っていった経過を説明している。

七二年ウォーターゲート事件の後、二名のＣＩＡ管理職リチャード・ヘルムズとシド・ゴットリーブの決定により、ＣＩＡのマインド・コントロール・プロジェクトに関する犯罪白書はほとんど全て消されてしまった。ＬＳＤや他の毒物を投与された被害者の大部分は本人が気付いていないため、損傷に対する損害賠償金は受け取っていない。また、ＣＩＡから金で雇われ、これらの薬品を他者に使用し、危害を加えた犯罪者達は、依然野放しで、アメリカの警察当局も捜査に及び腰である。

＊遠隔脳操作

（四）六二年、モスクワのアメリカ大使館の職員は、新種のマイクロウェーブのターゲットにされていることを発見した。ソ連は複合

の周波数で、広い変動波動のビームを高度に不規則なパターンにして照射していたが、情報収集目的の盗聴用にやっていたとは思えなかった。アメリカ大使館を直撃していたこのマイクロウェーブ・ビームはモスクワ・シグナルと称されている。

六五年秋、国防分析研究所（the Institute for Defense Analyses）は、この問題解決のための特別対策本部を結成し、ソ連が行なっている照射の再現実験を行なったが、マイクロウェーブは実験動物の中央神経系に影響を与えるという結果を得た。さらに国防省の最高秘密機関であるアドヴァンス・リサーチ・プロジェクト・エージェンシーは、特別な研究所を設け、同施設で数年間に亘り、リーサス（北インド産）モンキーにモスクワ・シグナルと類似の周波数で同様の密度を持つマイクロウェーブを照射するという実験を行なったが、結果は秘密にされている。この実験の後、類似の実験が行なわれたが、マイクロウェーブはリーサル猿や他の種の類人猿の中央神経系や行動に甚大で深遠な影響を及ぼすことが判明している。

（五）人を操作するためにマイクロウェーブ照射よりも手っ取り早い方法が、脳の特別な箇所に直接電流を流すことである。六〇年代の科学者は、電流量が制御できるラジオ・コントロール・テレメトリック装置で、脳の特定箇所に電流を伝え、動物や人間の気分や行動、睡眠その他多くの機能をコントロール出来ることを知った。

スタンフォード・リサーチ研究所のローレンス・ピーニオ博士と助手は、コンピューター制御のブレイン操作プログラムで、猿の行動をスムーズに導き出すことに成功している。このプログラムは猿の自然の動作を分析した結果出来たものである。

（六）電気的脳操作の分野での画期的な発明が、ジョゼ・デルガード博士のラジオ波使用の超小型トランスミッター・レシーバー「スティモシーバー」である。バッテリー不要で、生涯皮下に埋め込んでいることが可能で、脳操作や個人の調査に使用される。

（七）近代のテクノロジーの成果で「スティモシーバー」の極小化が進み、最初の機種の十分の一の大きさになった。また、マイクロウェーブで充電される充電式のバッテリー使用の強力な装置が完成している。つい最近、日立製作所は人間の頭髪の半分の幅しかない新型充電式バッテリーを発表した。秘密警察用や盗聴装置として開発された装置では、最小の機種とはどのくらいの小ささであるかというのは大変に難しい。

（八）七五年、原始的なマインド・リーディング・マシンがスタンフォード・リサーチ研究所でテストされた。このマシンは、人の静かな思考をモニターし、量には制限があるが、思考される言葉を認めるコンピューターであった。個々の言葉を声に出して言う、あるいは心の中で思う（思考する）、どちらの場合でもそれぞれの言葉

により、特有の脳波のパターンが出るが、この脳波グラフ（ＥＥＧ）の発見がこのテクニックを可能にした。

（九）七六年六月二十二日のナショナル・エンクワイア誌は、アドバンス・リサーチ・プロジェクト・エージェンシー（ＡＤＲＰＡ）に関する記事を載せたが、それによると、「七三年以来、同組織は、脳の電磁波を翻訳解読することにより、遠隔からマインド・リーディング出来る装置開発プログラムのスポンサーであった。このプログラムに参加している科学者は、この研究の最終ゴールは脳コントロールの実演であるとはっきり述べている。」

（十）このＡＤＲＰＡのリサーチに警鐘を鳴らす人が現れ、アメリカ軍当局は打ち消しにやっきになった。次の文は国防省の人材、厚生及び公共時事副総評ロバート・ジリアット博士の七六年十一月十九日付けの手紙の一文である。「小生の十一月十二日の手紙に示すように、ＡＤＲＰＡから受け取った情報は、ナショナル・エンクワイア誌の記事に載ったいわゆる〝ブレイン・ウェーブ・マシン〟の機能効果に関するものであるが、（中略）マシンは、その特殊な装置開発のための実験成功を図る意志で、積極参加している関係者の脳波だけを読むことが可能である。テクニックには限界があり、広範囲長距離使用は無理であるそうだ。この情報を疑う理由は皆無である。」

（十一）ジリアットは、脳の電気活動を遠隔からレコードし、操作する可能性のあるデルガード博士の「スティモシーバー」や他の類似の装置について知識のかけらも持っていなかった。また、人は自分の脳活動や脳波発生を自分では止められず、そして対象者が「積極参加の関係者」でないこともあるのだ、という点まで頭が回らなかったようだ。ＡＤＲＰＡはブレイン・リサーチをまだ止めていない。クレイグ・フィールズ博士によると、人間の脳波パターンをリアルタイムで分析する五年計画プログラムがあったと報告されている。同組織は第五世代スーパーコンピューター開発に参加している。

（十二）七〇年代に入ると、遠隔脳リサーチ分野の情報の出版公開が次第に脅かされてきた。機密でなく、公開で脳リサーチを行なってきたデルガード博士らの科学者は研究の資金繰りに苦慮するようになった。表向きの理由はこの種のリサーチに対する道義的な配慮がなされたとされているが、アメリカの人体実験の歴史という観点からすれば、この理由はいささか奇妙奇天烈である。さらに明白な事実は、アメリカ軍と情報局はこのリサーチを引き継ぎ、腕ずくで公開研究の息の根を止めたことである。公開研究に対する資金が途絶えたのと時期を同じくして、科学誌は遠隔脳リサーチも終了したと伝える記事を載せた。動物の脳を使った同じ実験に関するレポートもほとんど掲載されなくなった。

（十三）研究資金の行き先は公開研究から機密研究の方になったが、それには以下のような多くの利点がある。

a、敵国（ソ連）に貴重な情報が流れない。

b、法的道徳的研究基準により、研究の遅れを招くことがない。衆知のことであるが、アメリカ軍とＣＩＡは、人命が失われることもある各種の非合法で残忍な医学実験を施行してきたが、今日でも施行可能である。

c、研究が機密であれば、公の目を心配する必要がない。人は自分が知らないことは気にしないものである。そのため、政府はこのテクノロジーの悪の面を操って、密かに偏向的な政治指導者や気に食わない労働組合幹部等の「トラブルメーカー」をコントロールすることが可能なのである。

私の行動をコントロールするのに使用された電磁気がどのような形態であったにしても、リサーチ実験で検出し証明することが出来ると思う。しかし、私にとってそれは余りにお金がかかり過ぎるし困難である。例えば、品質の良い機種の検出機（スウィープ・レシーバー）は一台五万ＦＭＫ（フィンランド通貨）前後するし、それではデルカード博士の「スティモシーバー」タイプや他の進んだ超小型受信機の発見はできない。

私のフィンランド警察当局に行き、証拠を全て提出し、私の脳を電磁気的に操作する装置でも何でもそれを証明するものがないか、立ち入った調査をして下さいと頼みました。証拠があるにも関わらず、フィンランド警察からは適切な調査をしてもらえませんでした。奴等が馬鹿であるというよりも、もっと明快な理由はフィンランド政府は他の国家の政府と御同様に、自国国民の基本的な人権や健康、さらには生命よりも遥かに国家間の良好な関係の方が重大事なのです。警察は外国の情報局の犯した犯罪の捜査は行なわないので、何も判明しない。何も判明しないから、フィンランドと他国間の暖かい友好関係に水をさすものは何も存在しないことになります。

この種のケースで、警察が取るもう一つの行動は秘密調査で、これは犯罪の被害者が何の情報も持っていない場合です。これは外務省とのあらゆる裏取り引きを可能にします。

マインド操作実験の犠牲者にされ、「人間モルモット」にされた経験を一冊の本にまとめて出版したある人を知りました。その人はドロシー・バーディックで、彼女の著書は『Such things are known』（1982,Vantage Press,Inc.516 West 34th St.,New York）。

彼女の経験は私に非常に似ており、彼女は自分の脳を操作していたのは誰で、どのような方法で行なわれていたか調査し発見しました。私達二人は、違う所で自分に起こった事を本とパンフレットという形で曝露していたのですが、この事は、この新テクノロジーに

よる同様の犠牲者は何百人、恐らくは何千人も存在することを意味します。このような人々は、警察からも政府からも、いかなる組織からも救助されておらず、実験動物として扱われ、拷問され操作され、傷つけられ、時には殺されるという状態に置かれています。

（十四）医学実験に動物の使用禁止を求めて戦っている団体がありますが、無辜の非ボランティアの一般市民を実験動物として、危険で時には死亡するかも知れない実験に使用していることに反対して軍や情報局に抗議をする団体はありません。社会の中のあらゆる機関や組織は、翻ってこの暴政に喜んで手を貸しているようです。

＊カナダ政府の「耳が遠い」テクニック

私は、このパンフレットを四万部以上カナダに送りました。宛先は最高裁の全メンバーを含むカナダの著名人です。また、カナダ議会の議員全員に二度発送しましたところ、議員の一人ビル・ドーム氏は二回RCMP長官、法務次官ロバート・カブランに私の告訴に対して答弁するように求めました。法務次官は答弁をすることを約束しましたが、結果的には現在まで答弁は三年以上も持ち越しになっています。この間にも犠牲者への拷問と脳操作は続行しているのです。

この持ち越し延滞や黙り込みは、議会がきちんと運営されている民主主義国家では有り得ないことです。カナダ警察当局の責任者やその上に立つピエール・トリュドー内閣は一種の「見ざる、聞かざる、知らざる、ついでに信じざる」ゲームをしています。アドルフ・ヒトラーも、最近ではアルゼンチン軍事政府も自分達の残忍さを隠すために同じ「耳が遠い」テクニックを使いました。

私の経験からすると、世界中にマイクロウェーブ操作ネットワークが張り巡らされています。これは政治指導者や他の重要人物が世界中どこにいても、モニターし操作できるように設置されたものであることは明白です。今は八四年ですが、「ビッグ・ブラザー」は至る所に居るわけです。

＊その後の経緯

八一年一月三十日、ビル・ドーム議員は法務次官ロバート・カブランに書簡を渡し、私の告訴に対する答弁を求めました。法務次官は返書の中で、私のパンフレット内容について究明すると共に見解も述べることを約束しました。彼はこの約束を反古にし答弁を避けたことからして、明らかに私の告訴内容は真実で正しいことを知ったようです。国家において、議会が真に機能を果たしていれば、カブランは公正な調査を行なうよう要請されるはずですが、その意味ではカナダ議会はちゃんと機能していません。議会は沈黙したまま

で、うっとうしい答弁などは求めません。罪のない人々が生体実験に利用され苦しめられ殺されていても、カナダ議会は「黙秘権」を振りかざしているのです。このようなカナダ議会の対応は、カナダの民主主義は紙の上だけの存在だということを指し示しています。カナダ与党が身を隠すために誂えるイデオロギーの煙幕は、あの暴虐なナチ党の舞台装置そのものです。カナダ議会のリーダー達は暗黙の内に残酷な人体実験を支援しているのですが、全く同じことをナチもやりました。違う点はユダヤ人を使うか移民を使うかです。私がカナダの司法当局に公正や正義を求めることは、SS部隊に殴打され、家を焼かれたユダヤ人が第三帝国の法廷で正義を求めることと同じほど並外れて大それたことなのです。

＊私達への支援方法

もしカナダ議会のリーダー達が、私が訴える犯罪について無知（！）であれば、彼等は調査を決定し、RCMPや軍のシークレットファイルを暴き、カナダの法規法律の健全さを守ったでしょう。が、閣僚メンバーは、このケース全体を避けています。彼等にしてみれば、警察や軍当局は自分達の犯罪活動のための使い捨てゴム手袋なのです。ジョセフ・スターリンやリチャード・ニクソン（＊）、近年ではロナルド・レーガン（＊）も同類で、彼等は公から詰問があり次第、「その犯罪に関しては何ら関知しておりません。これは最高警察や軍将校らが計画したものです」と常套句を並べて弁解します〔＊これらの大統領（共和党）の回答は政府としてであり、恐らく大統領自身からのものではないと思います。千乃〕。

私達への援助をしたいとお考えでしたら、カナダ議会の議員のどなたへでも、或いはカナダ首相に手紙を書いて下さい。そして国家に正義を取り戻すため、司法権力を行使し、私のケースの公の調査をするよう依頼して下さい。軍及び警察の極秘ファイルにも捜査の手が及ぶ調査が必要と思います。もし、何か反応がありましたら、どのようなものかお教え頂ければ幸いに存じます。

＊：歩踏み込んだ手助け方法

A：この情報の配布――このパンフレットをお読みになりましたら、他の人にあげて下さい。もっと良い方法は、コピーをできるだけ沢山取って配布することです。出版物ではありませんので、自由にコピーを取り、他の人に無料配布ができます。そうすればより多くの人の目に付き、より多くの人が知り行動を取るようになります。

B：調査をする――警察権力が無視したこれらの出来事を詳しく解明できそうな人と、可能でしたら接触して下さい。私は二名の事件ジャーナリストの紹介でロバート・ネウスランドとコンタクトで

きました。彼はスウェーデンのブレイン・リサーチの被害者で、脳に装置をインプラントされボイスがしていましたが、外科手術で摘出できました。残念なことに大手新聞でこの記事を載せたところはありませんでした。建て前とは裏腹に、民主主義社会の「番犬」である「報道の自由」は、飼い主が吠えろと命じたときだけ吠えるのです。自分も似たような犠牲者にされているのではないかと不安に思っている方、また単に関心をお寄せの方、どなたにも喜んでお会いします。私の住所は以下の通りです。

Martti Koski
Kanervakummuntie 5,21290 Rusko,Finland

（傍線は千乃による。）

小児白血病と送配電線

滝　由紀夫

一、米国ＲＡＰＩＤ計画等における送電線磁界と発ガン性との関係

高圧送電線に起因する電磁界の健康への影響を網羅的に調査するために、米国エネルギー省と環境衛生科学研究所（ＮＩＥＨＳ）が運営管理するＲＡＰＩＤ計画が一九九二年に七十数億円に上る予算を計上して開始された。昨年六月にＮＩＥＨＳのワーキンググループが、同計画の七年にも及ぶ調査研究の総合評価でもある報告書を発表した。

同報告では、「送電線磁界に被曝することにより、小児白血病等の発ガン性があるかも知れない」としながら、「動物実験ではこの発ガン性は確認できない」という非常に不確定要素を多分に含んだ評価がなされた〔ところが私達キャラバンに居るメスネコ（二〇才代）は、事故で身障ネコになっておりますが、大腸ガンに罹っております!!　千乃も度重なる失禁攻撃で膀胱ガン（及び腎臓ガン）が発症しました。（島根県など）いずれの山道も送配電線が走り、送配電線の側を走行し、又、野営するキャラバンにおいて、人工Ｓ波の長期被曝は十二分に発ガン性があることを証言致します!!　千乃〕。

同報告書の全体を要約する評価は、次のとおりである。

「住居地域における被曝による小児白血病に関するリスク増大及び職場における被曝による慢性リンパ性白血病（ＣＬＬ）の発生増加についての限定的な証拠〔文末の（参考一）を参照〕に基づき、我々の過半数が商用周波数の電磁界（ＥＬＦ　ＥＭＦ）がおそらく発ガンの可能性がある〔グループ２Ｂ、文末（参考二）を参照〕として分類したことは、正統な疫学上の決定である。

これらのガンについては、その生体内（in vivo）、試験管内（in vitro）および機械論的研究の結果からは、その疫学的研究の結論である〃発ガンの可能性があるかもしれない

（グループ2B）〃ことを確証または論駁することはなかった。

しかしながら、その全ての証拠は、ＥＬＦ　ＥＭＦへの被曝による発ガン性の可能性と他のヒトの健康への有害な効果と関連する生物学的影響、機構、曝露環境について、一つの基礎を提示した。」

二、「磁界が相殺する」ことと疫学調査

送配電は三相交流で行われており、これらの電流を単純に加え合わせるとゼロになる。従って、送配電線の周辺では三相交流電流が作る磁界も互いに相殺する領域が存在することになる。この領域が、いわゆるスカラー場として捉えられる。

ここで、既存の調査結果を活用して、小児白血病の発ガン性について「磁界が相殺する効果をバロメーターに内包したもの」と「磁界そのものをバロメーターとして採用したもの」とを比較してみよう。出典は、昨年十月に発表された電気学会電磁界生体影響問題調査特別委員会「電磁界の生体影響に関する現状評価と今後の課題」中に掲載されている「磁界曝露と小児がんに関するメタアナリシスの結果の例」である。メタアナリシスとは、因果関係の判定を目的とする手法ではないが、多くの研究結果を整理・検討し、関連性の有無を推定する統計的手法である。

表中「曝露評価」で、「磁界相殺の効果」を排除していないものは「ワイアコード」であり、電流の強弱がその相殺効果と関連していると考えられる。「距離」は、送配電線までの距離であり、どの距離で磁界の相殺が顕著であるか、送配電線の構造も勘案しなければならず判定が難しい。また、「ＲＲ」は相対危険度を表し、１・５以上のものが疫学的調査の対象になり得る。ただし、信頼区間を示す「９５％ＣＩ」の下限値が１・０以下のものは統計的有意性がない。従って、ＲＲが１・５以上のもの、９５％ＣＩが１・１以上のものが小児白血病と関連があることになる（表中○印）。

（1）曝露評価「ワイアコード」について

全て、小児白血病との関連がありと判定される。

……（表中、上から5、9、12番目）

（2）「距離」について

小児白血病との関連があるもの

……（表中6、13、19、20番目）

〃　ないもの……（表中10番目）

（3）「磁界計算値」について

小児白血病との関連があるもの

……（表中3、16、17、18番目）

〃　ないもの……（表中2、8、15番目）

（4）「磁界測定値」について

小児白血病との関連があるもの……（表中11番目）

〃　ないもの……（表中4、7、14番目）

以上、曝露評価の方法ごとに、小児白血病との関連性をみてきたが、「ワイアコード」と「距離」では、比較的高い関連性を示しているが、「磁界計算値」や「磁界測定値」ではまちまち、あるいは否定的でさえある。なお、通常は、磁界が強くなった場合、小児白血病との関連が強くなるかどうかを調査するわけだが、ここでは「磁界の相殺と小児白血病との関連」をみるため、磁界の強弱との関連性には敷衍しない。すなわち、このメタナリシスの結果報告では積極的に、磁界の相殺による小児白血病との関連が指摘されていないということであり、言い換えればスカラーエネルギーが、生体に及ぼす影響について認識されていないと

研究者	曝露評価			白血病		リンパ腫		脳腫瘍	
				RR	95％CI	RR	95％CI	RR	95％CI
Ahlbom (1993)		1	○	2.1	1.1-4.1	1.0	0.3-3.7	1.5	0.7-3.2
Feychting (1995)	磁界計算値（≧0.20 μT）	2		2.0	1.0-4.1	2.1	0.8-5.5	0.8	0.3-2.4
	磁界計算値（≧0.50 μT）	3	○	5.1	2.1-12.6	3.3	0.7-15.0	2.3	0.6-8.0
Michaelis (1998)	磁界測定値（≧0.20 μT）	4		2.3	0.8-6.7				
Miller (1995)	ワイアコード	5	○	1.6	1.3-2.0		—		—
	距離（<50 m）	6	○	2.1	1.2-3.7		—		—
	磁界測定値（≧0.20 μT）	7		1.1	0.7-1.7		—		—
	磁界計算値（≧0.20 μT）	8		2.5	1.0-6.0		—		—
Meinert (1996)	ワイアコード	9	○	1.7	1.1-2.5	1.3	0.5-3.4	1.5	0.7-3.3
	距離（<50 m）	10		1.3	0.9-1.9		—	1.5	0.2-12.0
	磁界測定値（≧0.20 μT）	11	○	1.9	1.1-3.3	2.2	0.7-6.8	1.3	0.8-2.2
NRC (1997)	ワイアコード	12	○	1.5	1.1-2.1		—		—
	距離（<50 m）	13	○	1.5	1.1-2.0		—		—
	磁界測定値（≧0.20 μT）	14		0.9	0.5-1.6		—		—
Theriault[a] (1997)	磁界計算値（≧0.20 μT）	15		1.3	1.0-1.7		—		—
	磁界計算値（≧0.20 μT）	16	○	1.6	1.2-2.2				
	磁界計算値（≧0.40 μT）	17	○	1.5	1.2-2.2				
	磁界計算値（≧1.0 μT）	18	○	1.8	1.1-2.9		—		—
	距離（<50 m）	19	○	1.4	1.2-1.7		—		—
	距離（<25 m）	20	○	1.6	1.2-2.1		—		—
Washburn (1994)		21	○	1.5	1.1-2.0	1.6	0.9-2.8	1.9	1.3-2.7

(a)小児白血病に関する研究6件，成人の白血病に関する研究3件のメタアナリシス結果。

表：磁界曝露と小児ガンに関するメタアナリシスでの結果の例

いうことである。

三、磁界の相殺と小児白血病との関連

RAPID計画や電気学会レポートについて、小児白血病と曝露評価との関係をまとめると次のようになる。

(1) 居住地域における調査で、磁界の相殺の効果を積極的に排除していない一九七九年のWertheimer and LeeperのStudy、一九八八年のSaviz et alのStudyなどでは、送配電線の電流の強弱と小児白血病との関係が顕著である。このことは、電流が強く磁界の相殺効果が大きい方が発ガン性との関連がより顕著なことを示している。

(2) 他の居住地域での測定や推計による磁界の強弱と発ガン性との関連については、肯定的なもの、否定的なものが混在しており統一的な見解を得るに至っていない。この原因は、磁界の強弱に着目した場合は、「磁界の相殺」との関連が希薄になるか、あるいは排除されるためではないかと考えられる。

(3) 動物実験等に関しては、居住地域と異なり、「磁界の相殺」が無い状況下で実験が実施されており、発ガン性との関連はむしろ否定されている。

但し、通常の送配電線と形状が異なるため単純な比較は出来ないかも知れないが、sham exposure（磁界ゼロの状況）を逆方向の電流により磁界を相殺して作っている場合について、磁界をかけた場合と比較してみる価値があると考えられる。今後の課題は、磁界の相殺効果の影響を各研究機関が、積極的に研究対象とすることである。このことが、生体とスカラーエネルギーとの関連を世に認知させるきっかけとなることは間違いない。

四、S波・磁界対策の在り方

送配電線に起因する磁界そのもの、あるいは磁界の相殺（S波）と小児白血病等との関連は否定できないものがあり、特に、スカラー波（S波）については、人体のみならず各般に重大な影響を与えることが懸念されている。

先に述べたワイヤーコードと白血病との関連が顕著であること、それが電流の強弱、すなわち磁界の相殺効果との関連を強く示唆していることから、S波・磁界の軽減除去の基本的考え方は、送配電線を必要最小限に削減し、長距離送電を極力減らし、全般的に流れる電流を極力少なくすることである。また、配電線からの各家庭等へのS波流入

を阻止することも肝要である。

（参考一）発ガン性に関する証拠の分類

○「発ガン性に対する十分な証拠」：Working Group が、動因、混合物に対する曝露もしくは曝露環境とヒトのガンとの間に、一つの因果関係が成立されたとみなす。つまり、妥当な確信性をもって偶然、統計的偏り及び混合物が除外される研究において、被曝とガンとの間に積極的な関係が見い出されたということである。

○「発ガン性に対する限定的な証拠」：積極的な関係が動因、混合物に対する曝露もしくは曝露環境とヒトのガンとの間に観察され、それに対して Working Group が因果関係が確かであると見なすが、偶然、統計的偏りまたは混合物が妥当な確信性をもって除外され得なかった。

○「発ガン性に対する不十分な証拠」：利用できる研究が不十分な質、一貫性、または、因果関係の存在もしくは欠如の決定を認可できる統計的な力が不十分なものであるか、または、ヒトのガンについてのデータが利用できない。

○「発ガン性の欠如を示す証拠」：人類が遭遇すると知られる全ての曝露レベルの範囲を網羅した、いくつかの十分な研究がある。それらは、動因、混合物に対する曝露もしくは曝露環境と、研究されたあらゆるガンとの間に、観察されたどの曝露レベルにおいても、積極的な関係が見られないことについて相互に首尾一貫したものである。発ガン性の欠如を示す証拠についての結論は、必然的に、ガンの部位、状態、曝露レベルおよびその利用できる研究によって網羅される、観察の期間が限られているということである。付け加えて、研究された曝露レベルでの、非常に小さいリスクの可能性は、無視することは決してできない。

（参考二）発ガン性についてのグループ分け

グループ1――「その動因（混合物）がヒトに対し発ガン性を有する。この曝露環境はそれがヒトに対し発ガン性を有する曝露であることを意味する。」

この分野は、人に対する発ガン性について十分な証拠が存在する場合に使用される。特に一つの動因（混合物）が、ヒトについては十分な証拠であるよりは少ないものであるが実験動物についての発ガン性の十分な証拠があり、被曝したヒトにおいて動因（混合物）が発ガン性に関係した機構について機能することを示す強い証拠がある場合に、この分野とされるであろう。

グループ2A――「その動因（混合物）がヒトに対し発ガン性の可能性がある。この曝露環境はそれがヒトに対し発ガン性の可能性

がある曝露であることを意味する。」

この分野は、人に対する発ガン性について限定的な証拠が存在し、さらに実験動物について発ガン性の十分な証拠がある場合に使用される。いくつかの場合では、一つの動因（混合物）が、ヒトについては発ガン性の不十分な証拠があり、さらに実験動物についての発ガン性の十分な証拠及びその発ガン性が、ヒトにおいてもまた機能する機構によって媒介されるようなことを示す、強い証拠がある場合にこの分野とされるであろう。例外的に、ヒトに対する発ガン性の限定的な証拠に基づき、動因、混合物もしくは曝露環境が、この分野に単独で分類されるだろう。

グループ2B――「その動因（混合物、もしくは曝露環境）がヒトに対し発ガン性の不確定な可能性があるだろう。」

この分野は、動因、混合物もしくは曝露環境に対して、それについてヒトに対する発ガン性について限定的な証拠が存在し、さらに実験動物の発ガン性に使用される。それはまた、ヒトに対する発ガン性になるかもしれない。いくつかの例では、ある動因、混合物もしくは曝露環境が、他の関連データから得た支持する証拠を伴って、それについてヒトの発ガン性について不十分な証拠があるが実験動物について限定的な証拠がある場合は、この分野に分類される。

グループ3――「その動因（混合物、もしくは曝露環境）がヒトに対する発ガン性として分類されない。」

この分野は、動因、混合物もしくは曝露環境に対して、それについてヒトの発ガン性の証拠が不十分であり、さらに実験動物について不十分もしくは限定的である場合に、ほとんど普遍的に使用される。

例外的に、それについて発ガン性の証拠がヒトに対し不十分であるが実験動物について十分である動因（混合物）が、実験動物においてその発ガン性の機構がヒトにおいて機能しないことを示す強い証拠がある場合に、この分野に分類されるだろう。

他のどの分野にも結論できない動因、混合物及び曝露環境もまた、この分野に分類される。

グループ4――「その動因（混合物）がヒトに対する発ガン性をもたない可能性がある。」

この分野は、動因もしくは混合物に対して、それについてヒト及び実験動物の発ガン性の欠如を示す証拠がある場合に使用される。いくつかの例では、動因もしくは混合物に対して、それについてヒトに対し発ガン性の不十分の証拠があるが実験動物について発ガン性の欠如を示す証拠があり、それが他の広い範囲の関連データによって一貫して強く支持される場合に、この分野に分類されるだろう。

（傍線は千乃による。）

二十一世紀の宇宙論（新宇宙論）

―生命論―

小賀竹留

原子転換を基点として、（宇宙や）自然界のスカラー粒子を基本に据えたスカラー力学を案出しました。今後、多方面への応用と更に深みを加える必要があり、それに伴い今後変更修正を行う予定です。

一、原子生命の正体は、スカラー粒子と原子転換

ガン細胞は何故か知りませんが、酸素が足りない信号を発信し続けます。そしてガン細胞に向かって酸素を豊富に含む動脈流の血管が、そこに伸びて行きます。この新たに伸びた血管の養分を元にして、更にガン細胞が増殖し、次々と血管が伸びてきて、ガンがどんどん大きくなって行き、この場所にガンの固まりができます。この状態では、固まり内部のガン細胞には血流が届かなくなります。そして酸素と栄養の供給が絶たれ、内部のガンは死滅することになります。

加えて興味深いことは、ガン細胞は非常にイオン率が高く、細胞内の状況としては若くてどんどん分裂している細胞に似ているとのことです。細胞分裂している胚においても中は空洞になります。正常な細胞の場合、アポトーシスと言われる自然死により、細胞が死ぬことにより生命の形態が形成されますが、ガン細胞の場合には、このアポトーシスの働きが麻痺しているものと考えられ、どんどん増殖するのみで、この点では正常細胞とは大きく違っています。

若い細胞は酸素をどんどん消費するので、スカラー粒子をたくさん結合保持できる酸素を特に欲しがると想定すると、細胞内部でスカラー粒子と酸素等の他の元素との組み合わせによる原子核転換により、左記の様にカリウム（K）、窒素（N）、カルシウム（Ca）が生産されるのではないでしょうか。

N＋H　↑　C　＋O＋スカラー粒子：タンパク質の元
K　　↑　Na＋O＋スカラー粒子：スカラー粒子好き
Ca　　↑　K　＋H＋スカラー粒子：脊椎動物（運動の元）
H_2O　↑　O　＋H_2

Kや遺伝子はスカラー粒子を保持する役割があり、細胞内のスカラー粒子密度及びクラスター構造が小さく密になると同時に、神経の電流伝達や筋肉運動を直接的に担当しています。Nはタンパク質の合成に利用されます。更に、Caは、円口類動物がその運動速度を機敏に、より早くする時に、スカラー粒子の取り込みと排出量を増大させる必要が生まれ、増血の役割の強化も含め体内にCaを蓄積しました。従って、生体物質は酸素とスカラー粒子の蓄積によって生成されたと考えられます。つまり、スカラー粒子の集中した所に、KやCやOが集まり、その周りにスカラー粒子を嫌う物質（例えばナトリウムなど）が取り囲んだ構造ができた。この内部で右記の原子核変換が起こり、生命が生まれたのだと思います（こういう生命の発生パターンは言われれば確かにその通りです!!　何もない所からこれだけの千差万別の生物、非生物が生じるというのは、例えその始まりが、他の恒星系から飛来の巨大隕石に付着していた化学成分であったとしても、原始宇宙には重力→電磁気力しか存在せず、そのエントロピー、負エントロピー、そして〝進化〟の飛躍が現在の地球であり、他惑星、恒星、銀河系、星団、暗黒物質なのですから――。千乃）。

逆に、酸素やスカラー粒子が足りないときには、逆の原子核転換が起こります。そして、酸素が豊富になると細胞内からNaを排出する必要が出てきて、その機能が備わったものと考えられます。

K　↓　Na＋O　……（1）
N＋H↓　C　＋O
Ca　↓　Mg＋O
Ca　↓　K　＋H
Si　↓　C　＋O

以上のことを基礎にして、進化も含めた生命一般について、例えば、細胞分裂と卵割の考察／遺伝子と原子核転換の考察／外胚様、内胚様、中胚様の機能と原子転換の考察を手始めとして、専門の方に検討を進め深めていただければと思います。

蛇足ですが、ガンを押さえるには、KやCaやSiを、ガン細胞に供給すれば良いのではないかとも思われますが？

（癌細胞は正常の胚細胞と違って、さかんに増殖するのみで分化せず、動脈から豊富な酸素と栄養を受けても癌組織の中心部は壊死に陥る。癌組織では動脈血が充分行き届く所と不足する所のむらができる（水分子や血液のクラスター化、細胞組織のクラスター化→ガン化してガン細胞の生成。なるほど、人工の過剰漏電S波が、ガン発症の原因となるはずですよ!!　千乃）。もし、カリウム、カルシウム、珪素を投与すれば、酸素の不足している場所で原子変換がおこり、酸素の供給やアミノ酸生成に役立つし、細胞調節に不可欠な電解質の供給も起こり得るのではないか。増殖のさかんな組織はそれだけ熱が産生しているので、熱が原子変換の駆動力の一つとすると、癌組織においては原子変換の分布に差があることになる。現代医学では、癌細胞が正常細胞と違うDNA組成であることは解明できても、癌組織の形態まで予測できないが、原子変換の分布の違いに目を向けると説明できるものと考えられる。　大岡　広）

（いたずらに抗ガン物質を投与して患者を苦しめるよりも、西洋医学でも安全なガン細胞の無害化への道が開けるかも知れませんね!?時間は掛かるでしょうけど——。只、それ迄に又何千匹のマウスが犠牲になることやら——。抗ガン剤と比較しつつ実験しますからね——。もう判っていることを……。　千乃）

二、原始地球

原始地球では、スカラー粒子が大量にあり、軽い粒子よりも重い粒子が大量に存在していた。生命が誕生する以前から、地球に一番たくさん存在するシリコン（Si）は存在していた。太陽からの放射エネルギーが減少するに従い、スカラー密度も減少し、Siや鉄などが、原子核転換によりC、O、Na（ナトリウム）、Mg（マグネシウム）、H（水素）等に分裂して生成された。同時に酸素原子や分子が多い所ではスカラー粒子が密集し、物質が集まり、原子核転換を行い始めることになった。この場所こそが原始生命誕生の地だったのです。

そして、Siの、炭素（C）とスカラー粒子とたっぷり結合した酸素（O）への原子転換が加速し、（1）式のように、窒素（N）と水素（H）が生成され、次々に、H_2O、Na、K、Caが生成されていく。その過程で地球の電磁場／地質／地殻の進化と共に、大気や海や生命の進化へとつながっていったのでした。

三、太陽系の秘密

真核の単細胞生物には、自分が二つに別れる単性増殖と雌雄による増殖の二通りがあります。例えばスカラー粒子がたくさんあふれていた太古では、陽子がスカラー粒子を取り込みため込むと、身体

をふるわせた瞬間に分裂して（面白いですね！　千乃）子供の陽子が生まれるので、これは単性増殖に相当します。この陽子の単性増殖は、素粒子を研究する加速装置の中でも同じ様なことが起こっています。また、原子の世界での雌雄は、陽子と電子に相当します。現在は電子が陽子の外側の軌道から、内側の軌道に移動する時には電磁波を放射します。しかし式Cのように、太古では陽子と電子とスカラー粒子を放射していたと考えられます。従って、原子もまた生命と同じように、自己増殖していたのです（蛇足ですが、このような太古の世界では電磁波が存在できないので、光速度を基準とする相対性理論は成立しません）。これに加え、参考文献から、太陽系には当初太陽と木星が存在しており、そして木星から水星／金星／地球／火星／小惑星帯（第十一番惑星フェイトンがニビルの衛星との衝突で破壊されたもの）が生まれたと考えられます。

（式Cの証明）

二個の電磁波が、原子核のような強い場の中で衝突すると、式Aのように電子と陽電子が生成されます。

電磁波1＋電磁波2　→　電子＋陽電子……式A

次に、電磁波2を両辺から引くと、式Bが導かれます。

電磁波1　→　電子＋陽電子－電磁波2……式B

最後に、原子から電磁波が放射されると、つまり電磁波が引き算されると、電子は原子核により近い軌道を公転するようになるので、スカラー粒子が取り込まれます。従って、電磁波の引き算は、スカラー粒子の足し算に等しいのですが、式Bの電磁波2の引き算をスカラー粒子Sの足し算に置き換えると、式Cが導かれます。

電磁波1　→　電子＋陽電子＋S粒子……式C

原始太陽は今以上にエネルギーを放射していたとすれば、どんどんスカラー粒子を取り込み続け、太陽の成長と共に徐々に重たくなったのではないか、つまり太陽は軽かったのだと考えられます。核融合による太陽の寿命は間違っていることになります。同様に、太陽系の惑星もまたスカラー粒子を取り込み続け、質量が重たくなった。そして、地球の核には鉄などの重たい物、地表にはシリコンが生成されたものと思われます。水星／金星／地球／火星／フェイトン（小惑星帯は惑星フェイトンが破壊されたもの）には、地殻とその周りを覆うシリコンがあり、しかもその比率がほとんど同じである事から、環境が整えば現在の地球のようにシリコンによる原子転換から生命が発生すると考えられます。

そこで、更に推論を進めてみると、かつて太陽と木星の放射が大きかった時、水星／金星／地球／火星は現在の金星のように乾燥し

ており、地殻と地表がこれからも形成され続けていく途中だった。一方、当時小惑星帯の場所にあった惑星フェイトンには水と大気が生成され、生命が発生した。当時は、水星／金星／地球／火星は現在よりも小さく、一番生命活動の活発な惑星フェイトンが大きかったと考えられます。

同時に、太陽の放射の弱まりと共に、火星が水の惑星になり、種族間のプラズマ兵器や核兵器等を用いた殲滅戦で母星の住環境が劣悪化し、他惑星に移住を目的としていた異星人達は、火星の生命環境を整えるために、OとHとCを生成する目的で原子核転換を利用した。それには微生物を植え付ければよい。次に、水と大気と炭水化物を火星に、そして生命の移殖へと進んだものと推測されます。

もし移住が時期尚早であれば、惑星フェイトンの地下都市に待避して、人面岩などを宇宙船発着地の目印として、時を待つことになっただろうと思われます。当然、肉体を持つ種族ならその遺伝子を、霊体ならばその肉体の記憶を大切に保存していたと推測されます。

只、参考文献によれば、太陽系には公表されていないが実在が確認されている惑星が三個あり、地球と同じ軌道の裏側を公転しているヤハウェ、破壊されて小惑星帯になる前の惑星フェイトン、現在、海王星か冥王星までの距離の約三倍の所に居るニビル（ボイジャー二号からのデータ分析から、現在太陽系に近付きつつある）などです。この中で、惑星ヤハウェが木星から生まれ、フェイトンを破壊して、地球の軌道に落ち着いたという興味深い説明があり、それに関し、少し考察してみましょう。

惑星ヤハウェが木星から生まれたばかりの時は、溶岩や水蒸気などのまだ柔らかい固まりの状態で飛び出したはずです。ヤハウェの写真を見ると水色の惑星なので、宇宙空間に飛び出したときに水蒸気などをまき散らしながら極端に速く冷えて固化したのではなく、個体内部は溶岩状態で、大気や水の元となる氷や酸素は岩石に吸着されていたり、氷として惑星が引き連れていたと考えられます。そうでなければ、写真のヤハウェのように水色の大気は存在できないと思われます。だとすれば、フェイトンに近付き破壊した時に、この生まれたての柔らかい惑星もまた大きな被害を被っていたはずです。宇宙人ユミットによれば、知的な生命体が発生するような惑星は、地殻活動が活発ではないと言います。例えば、ユミット星では、大きな大陸が一つ有るだけで、アイルランドのようになだらかな地形だとのこと。さらにユミットは、地球のように活発な地殻活動と、起伏に富んだ地形、さらには大陸が分割され、北半球に集中しているような惑星に、ユミット星よりも多種多様な生態が形成され、知的生命が発生したのは興味深いと言っています。

ユミットの話を加味すると、木星から生まれたのはヤハウェでは

なく、地球だったのではないでしょうか。地球がフェイトンを破壊し、同時に月を引き連れて現在の軌道に落ち着いたという可能性も考えられます。あるいは、惑星ヤハウェが惑星フェイトン及び地球に衝突したとも考えられますが、だとすると惑星ヤハウェは度重なる衝突のために、地球以上に大きな傷跡が残っているはずです。残念な事に写真からだけでは判断できません。更に、フェイトンとの衝突時にフェイトンの一部を現在の地球の位置まで引き連れて来た破片が月になり、残りが粉々に砕け、長い年月の間に小惑星帯のような軌道に落ち着いたのだとも推測できます（古代シュメールの粘土板から、ゼカリア・シッチンは、惑星ニビルの衛星がフェイトンと衝突、地球と小惑星帯に分かれた。その時十一個の衛星を引き連れていたフェイトンは、最大の衛星、月を地球に連れて行かれたと述べています。千乃）。参考文献によれば、月の内部が空洞に近い事は、月に起こした人工地震の観測結果から分かっており、月の地核部分が何らかの原因で外部に出てしまい、その時に空洞ができたのだとのこと。また、月の表面に排出された地核の重い物質が地球との引力で引き合うので、月はいつも同じ顔を地球に向けているという説明がありました。更に、月の質量密度が火星に近いことから、月はフェイトンの一部だったのだと推測されます（更にゼカリア・シッチンは、シュメール板に非常に忠実な古代アッシリアの粘土板から創世神話を読み取り、旧約聖書の「創世記」と殆ど同じであることを発見したと記述しております。『謎の惑星ニビルと火星超文明』上巻　千乃）。

もしフェイトンが、地球かヤハウェにより破壊されたのなら、その破片は当時の火星の方向に飛び散ったと考えられます。現在小惑星帯は火星の軌道から、遠くは木星の軌道まで分布しており、木星の重力に引きつけられて、その状態で重力的に安定な位置に存在しているので、かつてのフェイトンの位置は現在の小惑星帯よりも木星よりの軌道に存在していたのだと思われます（その通り。古代シュメール板にそう図示されています！　千乃）。

やがて、太陽の放射の弱まりと共に、地球が水の惑星になり、地球の生命環境を整えるために、フェイトン人〔只、これは惑星ニビル人（超古代シュメール文明によれば、アヌンナキ族）だとの説があります。ゼカリア・シッチンの著書参照。その辺りを小賀様に再検討して頂きます。千乃〕が火星に行なったことを地球にも行なった。これから更に太陽の放射エネルギーが減り、金星が水の惑星になり、地球に住めなくなると、金星の生命環境を整えるために、これまでと同じ事を繰り返すのかもしれません。

それにしても水星／金星／地球の順に質量が増えていっているの

に、火星と小惑星帯の質量があまりにも小さく不釣り合いですね。しかもご存じだと思いますが、古代火星には非常に発達した科学文明が存在していた（これも超古代シュメール文明の粘土板から、アヌンナキ族主導の火星人の文明か、アヌンナキ族によるもの。千乃）といいます。例えば、地球の生命の進化に、月による海の潮力は非常に大きな影響を与えており、つまり丸い形の生命が潮力により細長くなり、臓器や神経系が飛躍的に発達したのですから、生命の進化を促進し、知的生命の発生を促して生息可能にするために必要だったと推測できます。従って、太古の火星に知的な生命が進化するには、フェイトンが月と連星もしくは双子星であった可能性が大きい。そうすれば、火星の質量が不釣り合いに小さいのもうなずけます。

火星超古代文明によれば、惑星ニビルのニビル人（アヌンナキ族）が大気の消失をくい止めるために大量の金が必要だったとのこと。また、モントーク計画の情報リーク者によれば、火星地下基地に大量の金が発見され、「過ちを繰り返すな」の電波が発信されているとのこと。一方、火星には太古に、空気と水が大量に存在していたことが分かっています。この大気と水が消失した原因として、核戦争やプラズマ兵器の使用はあり得ない。もしあったとすれば、宇宙人ユミットも言っているように火星表面が高温でガラス化しているはず。惑星ニビルと同じ原因で大気が消失し、地下都市を建設したと考えられないだろうか。だったら、大量の金が必要なのも理解できます。金の用途としては、ハープシステムによれば、電離層に銅粉をまいてプラズマを増加させることができ、これに電磁波を当てれば更に効率よくプラズマが発生するとのことで、金を使用すれば更に有効だったと考えられます。他にも、気功治療の時に気の流通を良くするために金を使うとのことで、惑星からスカラー粒子が放射され続けるのをくい止めたり、スカラー場の調整やスカラー粒子の損失を補おうとしていたのだと推測されます。母星が保持している限りのスカラー粒子を取り出そうとすれば、母星の加齢が進み、大気や地核のエネルギーが徐々に無くなっていくとともに、生命も弱くなってしまう。人工的なことが原因で、火星の三分の一にも及ぶ裂け目は地核が萎縮して陥没してしまったのかもしれません。更に、火星の赤い色は酸化鉄だとのことですが、火星の写真を見ると陥没域は余り赤くないので、火星が赤くなった後に、陥没したと考えられます。火星の場合、このような危機を事前に察知し、ハープシステムで電離層に銅粉を撒いたように、少しでも長く生き残るために銅粉の代わりに鉄粉を撒いたのではないでしょうか。そうすれば太陽からの紫外線や人工の電磁波による電離層のプラズマの維持が効率的にできると同時に、失敗した場合には二酸化鉄として酸素

を火星表面に蓄積でき、地下に移住した後でも、酸素が必要な時に二酸化鉄を分解して利用することができるからです。参考文献によれば、不思議なことに、火星の基地は誰もいないが、現在も正常でスイッチ一つで正常に稼働できるような状態であるという。これは、カッパドギアの地下都市や忽然として消えたマヤ人など、地球にも似たような事例があり、同じ種族だとすれば火星と地球を一端捨てて、何らかの理由で一緒に他の惑星へ移住し、再び帰還する予定なのかもしれません。

惑星ニビルの文明と火星文明は同じものである可能性も大きく、更に火星の地下都市にエジプトと同じ様な像があることや同じピラミッド文明であることから、惑星フェイトン文明＝惑星ニビル文明＝古代火星文明＝古代シュメール文明＝エジプト文明＝シリウス文明＝プレアデス文明ということが推測されます。

まとめると、惑星ニビルと火星は元々連星もしくは双子星で、同じ惑星軌道と文明を共有していたが、火星とニビルが衝突する危険性が出てきて、犯罪人をニビルに詰め込み、その軌道から追い出した（そんなすごい事が出来るのですか!?　千乃）。そして、火星もニビル文明も大気が消失するという同じ原因で、母星が砂漠化してしまい地下都市を建設するか、地球やヤハウェに移住した。

更に、二十一世紀にはヤハウェが姿を現すと言われています。だとすれば地球とヤハウェが衝突する危険性も出てきたことになり、マヤの二〇一二年の破局的な予言はこのような天文学的な予言だったのかも知れません。マヤの予言によれば、二〇一二年の破局の後、神々が地球に帰還し平和な世界が実現するとも言われています。

最後に、ピラミッド文明が太陽系発なのか、宇宙人から教えられたものなのかという点については、モントーク計画によれば火星文明は太陽系ディフェンス・システムを稼働させていたということなので、火星に移住した異星人が（惑星ニビル―アヌンナキ族）太陽系外からの更なる侵略を恐れていた。もしくはかつて米国原住民と英国からの開拓団との間に戦いがあったように、異星人同士の戦いがあったのかも知れません（ニビル人とオリオン星人など）。

補足1：

参考文献によれば、金星の記述が神話に登場するのが約三千五百年以降である。つまり、金星は約三千五百年前に木星から生まれ、火星や地球に接近し被害を与えて、現在の軌道に落ち着いたのだろうと言います。

さらに、金星が火星に近付いた時に、金星から鉄が火星に撒き散らされたという説明がありますが、鉄の説はあり得ないと思います。というのも、この説明が正しければ、火星と鉢合わせした側に撒か

れその裏側には撒かれないはずです。それからもし鉄が撒かれるとしても、金星から放出されたどろどろの鉄は宇宙空間で冷やされ、固まりになって降って来るので、鉄粉のみが降るとは考えられません。

もし金星が大量に鉄を保有する星なら、火星よりも質量の重たい地球に接近した時にも降るだろうし、また現在の金星には地核にある鉄が噴出した爪痕が残り、その表面に鉄が大量に存在するはずですが、そのようなことは聞いたことがありません。もし大量の鉄が噴出したのなら、月のように内部が空洞状態で大気は存在しないと思います。

補足2：

金星人については、セムヤーゼやアダムスキーの著書他（これは素性を知らせない為で、ニビル人＝アヌンナキの可能性も大です。千乃）で、真偽は別としてたくさん情報があるのですが、火星文明についてはほとんど記述がありません。モントーク計画の中でも、火星文明についての記述はほんの数ページ程度です。つまり、金星に住んでいる宇宙人は（？　例え宇宙人でも、現在の金星の高温高圧下では住めないです。金星人というのにはウソがあります。地球に居る異星人ではないですか？　千乃）移住してきた宇宙人ですが、かつて火星で進化した火星人は何処に行ってしまったのでしょうか。少なくとも、出身である太陽系に一番帰還したがっているはずなのに、一番情報が少ないというのはやはりおかしいと思います。だとすれば、火星人はすでに地球に移住してきており、人類と共にこの難局を切り抜けようとしている方々と、悪のニビル人のように地球を破壊し、火星を水の星に戻そうとしている勢力があるように思われます。この勢力こそが、モントーク計画を推進した、反正法の根元ではないかとも思われるのです。

本文で説明したように、人工的なことが原因で、火星の三分の一にも及ぶ裂け目ができてしまう程の無茶を行なったのは、火星にあるという太陽系防御システムを完成させたいがためだったのかも知れません。

謝辞：

「三、太陽系の秘密」に関しては、一条様が資料の調査及び基本的なアイデアを提供されました。それを我々で検討し、先生からコメントを頂き、水谷様、河井様と再検討してまとめました。

参考文献：

『衝突する宇宙』イマヌエル・ベリコフスキー　法政大学出版局／『謎の惑星「ニビルと火星超文明」』ムーブックス／『太陽

系十二番惑星ヤハウェ』ムーブックス／『モントークプロジェクト1　謎のタイム・ワープ』ムーブックス／『モントークプロジェクト2　タイムアドベンチャー』　ムーブックス／『宇宙人ユミットⅠⅡⅢ』徳間書店／『悪魔の世界管理システム「ハープ」』ムーブックス

四、スカラー力学の紹介（自然界のスカラー粒子）

『JI』九九年二月号で、スカラー粒子の互いに引き合う性質のみを仮定して、核力／電磁力／重力の説明をしました。今回は、スカラー粒子の内部の歪みと捻れが、内部で振動し回転し捻れ歪むことで、周囲からは運動量や質量や電荷や磁気として観測されることを説明します。つまり、素粒子内部の回転や捻れや歪みが、スカラー空間の歪みや捻れとして伝搬し、その捻れと歪みが他の粒子に力として働くというものです。

加えて、陽子はスカラー粒子を吸収し、電磁気を放散するため、スカラー粒子を歪ませ、捻れさせる構造があり、クオークやサブクオークを形成しています。一方、電子は電磁気を吸収しスカラー粒子を放散するため、捻れと歪みを平らにするだけの簡単な構造だということを認めると、丁度太陽とその惑星のような関係が成立していることが推測できるかと思います。

他方、ニュートンの法則（F＝ma）に現れる慣性質量（m）は、物体に力（F）を加えると、その力の方向に加速（a）されることを表現しています。同じ力を加えても、慣性質量の違いにより加速の度合いが違ってきます。つまり、軽い物ほどたくさん加速されることになります。ここであらためて、力とは何かを考えてみると、例えば手でボールを押す場合、ボールから見ると、指の先端にある原子核の周囲の電子が近づいてくるように見えます。同じように、指先から見るとボールの表面にある原子核の周囲の電子を押そうとしているのです。ボールの電子と指先の電子は同じ電荷なので反発し合う。このために、ボールが指先と反対方向に反発する力を受けて、加速されることになります。分かりやすく言えば、椅子に座っている我々は、ミクロの目で見れば、ほんのわずかですが椅子から浮き上がっているということが分かると思います。つまり、我々が力といっている物の正体は、電磁気力だということです。つまり、重たい物はこの力に対する感受性が小さい物体のことで、軽い物はこの力に対する感受性の大きな物体のことだと言うことが理解されます。

さて、スカラー粒子に対する感受性を考えると、力（電磁気）を吸収しスカラー粒子を放散する物体の方が慣性質量が軽いのだから、同じように考えて、スカラー粒子を吸収し電磁気を放散する陽

子の方が電子よりもスカラー粒子に対する感受性が大きいことになります。つまり、重たい物体の方が、軽い物体よりもスカラー粒子に対する感受性が大きいことが理解されるのです。小さなスカラー力により、重い物がいとも簡単に動き、軽い物は動かすことができないというような事も起こってしまうのです。

九九年三月号「新宇宙論(8)」「付録：スカラー力学への導入」及び九九年二月号掲載「新宇宙論(7)」で説明したように微少空間の捻れや歪みが、スカラー粒子の正体であり、加えて力の根元でもあり、その性質により波動に見えたり、物に見えたりします。この歪みと捻れから物質を考察する視点は、細胞にも、生命にも新しい視点を与えることができるものと思います。また、三権分立のようなシステム的な考え方にも近く、他にも心のメカニズムの解明にも役立つものと思います。

五、人工スカラー波による地球の重力異常について

地球全体を近似的に、一つのフルネセレー系だとして、左記のように定義します。地球は太陽の周りを公転しているため、太陽系のフルネセレー系と同調していて、九九年三月号「付録：スカラー力学への導入」に掲載の数式H1、2、3のように太陽から見て粒子ではなく波動的に見えていたものと考えられます。人工スカラー波により地球のフルネセレー系が変化した場合、太陽系のフルネセレー系からは付録H4、5、6のように粒子として見えてしまい、その公転軌道からそれて、大量のエネルギーを放射しながら太陽に引き込まれることになります。もしくは、逆に太陽からはね飛ばされることになります（数式については、九九年三月号付録：「スカラー力学への導入」を参照して下さい）。記号の意味としては、κが歪み、τが捻れ、e1が地球の進行方向、e2が太陽方向、e3が地磁気方向、mが地球の質量、vは公転速度、sは地球の軌道です。

地球電場　de2／ds＋κe1－τe3＝0　……⑦1

地磁気　τe1＋κe3　……⑦2

自転量　e1／κ＋e3／τ　……⑦3

地球の質量　m＝m（1±√κVV／2）　……⑦4

人工スカラー波のκとτ（κκ－ττ＝0）を左記の場合に分けて考察します。

（1）κ＝τ＝0の場合

この場合、人工スカラー波が蓄積されれば、地球の重力は増え、圧力が増しκは大きくなる。

このため、磁場が減少、地球の自転は大きくなり、内側の軌道に引きつけられる。

重力が増えるので、これまで釣り合っていた遠心力と重力が左記の式でバランスしていたものが、壊れてしまいます。左式で、Mは太陽の質量、rは太陽から地球までの距離です。

$$mvv/r = mMG/rr$$

地球の質量が増えても影響ないが、重力常数Gが人工スカラー波分だけ大きくなれば、当然その分だけ太陽へ引きつけられる力が増大し、遠心力と釣り合うところまで地球は太陽の方へ軌道を変えてしまいます。

スカラー粒子は電磁波（κ小）と電荷（κ大）に分かれてしまい、電磁波成分は地球から外に放射され、地球に電荷が蓄積されてしまいます。

この蓄積された電荷が放電により、地球外へ放射されれば、もしくはこの蓄積された電荷が宇宙からの電磁波を吸収しスカラー粒子として地球外へ放射されれば、地球はこの自浄作用により安泰です。どのくらいの自浄能力があるのかは分かりませんが、現在の磁場の減少から、単に左翼ゲリラの個人用ビーム兵器だけではなく、三相交流の送電方式による人工スカラー波の発生によるものも考慮する必要があります。元々太陽の衰退により、スカラー粒子の減少をくい止め、地球の若さを保ち、ひいては生命が生き続けたいと思う本能が電気文明を産み三相交流を発明したのだと思います。この文明を悪用し、三相交流から人工スカラー波を大量に発生させているのです。地磁気が減少し、電界に異常が発生するため、電磁気的な現象や気象異常も含め方々で多発する。自転が速くなるため地球が若干膨張し、津波や地殻変動が激しくなる。

（2）地球の捻れや歪みと同じ場合

この場合、人工スカラー波が蓄積されれば、（1）が更に加速された状況になります。

κとτは大きくなる。このため、磁場が減少する、質量は重く固く小さくなり、電界は元のままで変位が大きくなる。原始状態の地球に逆戻りするようなものです。

（3）地球の捻れや歪みと逆の場合

κとτの低下をまねき、もっとひどい状況になります。

極端な場合には、地球がそれまで公転を続けることができればですが、磁場が逆転、地球の自転が逆転、電界は逆転してしまいます。

おそらく、この過程の途中で、地球のκ＝τ＝0となり、地球自身を維持できなくなってしまうことになり、地球は内部構造も含め見る影もなくなってしまう。

補足：JI二十巻特別増刊号『迫り来る地球の危機』のP239～240のエル・ランティ様による地磁気の弱まりと自転軸との関連について左記のように解説を頂いております。

「現在、兵器として人工的に合成し、使用されているスカラー波は左回りの粒子――電子を放射するので、日本の裏側のブラジル南部から地磁気がどんどん消失しているのです――。これは地球の自浄作用とも言えるのですが、……A

あまりに多くなりすぎると、勢い地軸の北極から西に傾き始め、そして、地軸の傾きが大きくなり続けると、ついに地磁気の逆転が起こります。その時点で人類は他の生物を含め、ほとんどが死滅しますから、……B

その後、奇跡的に地球自体が太陽との正常な重力バランスを取り戻し、地軸の傾きも元に戻る可能性もあります。只、インターネットを中継する何万という通信衛星及び人工衛星は、地球周回軌道に停止、あるいは回り続けます。それが太陽系の惑星配列の混乱を生むでしょう。……C」

（その後は太陽系について言えば、予測不可能と天上界が言われます。千乃）

この説明を右記のA、B、Cに分けて理解できる範囲で説明したいと思います。

〈Aの説明〉

人工スカラー波は、地球のスカラー波と同じ回転をしており、蓄積されればされるほどκは大きくなり、τは小さくなる。重力が大きくなり磁場が減少する。加えて、スカラー粒子が電磁波（κ小）と電荷（κ大）に分かれてしまい、電磁波成分は地球から外に放射される。地球に電荷が蓄積されてしまいます。この蓄積された電荷が放電により、地球外へ放射されれば、もしくはこの蓄積された電荷が宇宙からの電磁波を吸収しスカラー粒子として地球外へ放射されれば、地球はこの自浄作用により安泰です。

〈Bの説明〉

さらに人工スカラーが蓄積され続けると、κが更に増大し、τが小さくなってしまう。このため、地磁気が更に減少し、同時に地軸が傾斜する。

そして、地球が太陽に引き込まれず、地球軌道がそこにとどまるためには、蓄積された人工スカラー波を一挙に減少させる必要があります。そのためには、τが反転すると②12式からそれまで保存されていた公転自転のエネルギーが放射され、磁場が正常の時よりも弱いのですが逆転してしまいます。この時、自転速度は極端に緩くなります（九九年三月号付録3・3参照）。

〈Cの説明〉

本部分の説明にはもっと正しい解釈があるかも知れませんが、左記のような説明を考えました。

現在の地球においては、余分の人工スカラー波が放射されてしまえば、おそらくその前に太陽に吸い込まれると思いますが、もしも太陽との位置関係に見合う地球の κ と τ に戻ったとします。

人工衛星は北極上空から見て左回りもしくは地球に対して静止しています。地球の影響によりこれらの衛星が κ と τ を持つと、磁気と電荷を帯び、電子と同じようにスカラー波を生成し続け、地球重力や質量が増大すると考えられます。一方、長期的に見て太陽の放射量が減った時に、太陽の放射波長がだんだんと伸びて各惑星の軌道が外にずれようとするようになります。その時に、地球だけが他の惑星と比べ相対的に内側に移動すれば、いずれは他の惑星と衝突したりして、太陽系の混乱から崩壊に繋がるということなのではないでしょうか（月の場合だと κ が小さくなれば自然に離れていくのだが、人工衛星だと地球に余りに近いため地球から離れない）。

以上のことから、違法送配電線工事の電線につるされたループやコイルなどは、そこに流入放散するスカラー波に対して、故意に κ を強めさせているのだと思います。そうだとすれば、人工スカラー波を強めることができます。

また、以上のことからの推測ですが、月もまた衛星と同じ方向に地球を公転しています。人工衛星と地球のスカラー的なメカニズムを意図して、異星人もしくは他惑星人により配置されたのではないでしょうか（前記のようにゼカリア・シッチンの古代シュメール板の解読によると、惑星ニビルの衛星がフェイトン（ティアマト）と衝突して、地球と小惑星帯に分かれた時にフェイトン（ティアマト）の衛星であった月（キング）が地球の衛星となったとあります。月を配置したのではないようです。更に飛鳥理論によれば、惑星フェイトンも又、木星の大赤斑から生まれたということになりますね！金星然り、ヤハウェ然り――。千乃）。つまり、恐竜時代の直後の地磁気変動や磁気ジャンプや氷河期のように地球のスカラー粒子が一度に放射されてしまい、地球には生命が住めなくなってしまうところを、月を配置することでスカラー粒子の蓄積を進め、現在のように他の惑星と比べて質量の大きな生命の生息できる地球に成長できたものと推測されます。

（人工スカラー波の蓄積による地球軌道の最終的な結論は「Ⅲアヌンナキ（神々）と人類の歴史　一、太陽の生成について　補足一・二」を御参照下さい。）

補足：ボーデの法則は太陽系の各惑星が、太陽からの距離を基準と

して整数比で表されることを表現しています。これは、太陽から放射される波動の波長に同調（波長の×2倍）するような場所に惑星が位置していることを意味しており、例えば太陽からの放射波動の波長が短くなれば各惑星は太陽に接近し、波長が長くなれば離れることになります。しかし、そんな時でもボーデの法則は成り立っているのです。従って、太陽系は太陽の衰退と共に徐々に広がっていくのです。それは、宇宙が膨張しているのと同じ事です。

また、一度収縮した宇宙がビッグバンにつながるメカニズムについては左記の補足を参照して下さい。まさに、ムー文明でいうところの宇宙卵という表現がぴったりです。つまり、スカラー粒子が小さく収縮し、その歪みと捻れに適応する波長に応じて卵割のように細かく小さく分裂していった。そして、ついに外へと広がり出したと考えられます。

ところで、太陽からの放射波動が短かった時、惑星系の位置は現在よりも太陽に近かった。従って、木星より遠くの惑星に生命の可能性が十分にあったことになります。しかも、「三、太陽系の秘密」で説明したように、地球と同じく衛星を伴う惑星なら知的生命への進化も速かったと推測します。土星の輪はもっと他の意味があるにしても、このような視点で太陽系を見直す必要があるのではないかと思います。（全くその通り。私もずっとそのように考えていました!!　千乃）

補足：受精卵が分割する時は、スカラー粒子が集まってきて κ と τ が増大する。すると、波長が短くなり現在の細胞の大きさの半分の波長になり分割し、一つ一つは小さくなるのだと思います。

同じように地球にスカラー波が蓄積されると、地球の表面振動の波長や周波数が短くなり、卵分割のような自然変動が発生します。

軍隊が橋を渡るとき、足並みをそろえると橋の振動波長と同調すると橋が分解されてしまうので、足並みを乱すそうです（すごい!! 誰が考えたのでしょうね!? 何処かで実際にあったことでしょうね!! それで考えた――。千乃）。

現在の地球は、卵割のようにスカラー波の分布（パワースポットと呼ばれ、二十四面体だと言われています。また、このパワースポットの地点に多くの古代文明が発生している）があるだけで、卵割のような大きな溝はありませんが、これ以上の急激な人工スカラー波の蓄積は、地球の分割と内部の空洞化から、分裂の可能性も考えられます。太陽系についても同じで、パワースポットの位置に惑星があると考えて下さい。地球の所に溝ができてしまえば、そこから惑星配列の混乱が生じ、それが広がるということもある。長期的にはカタストロフィーにも発展します。

六、スカラー力学的に生命を捉えるために

順番としては、陽子／電子／中性子、原子核、原子、化学物質というようにスカラー粒子・歪み・捻れを応用しながら進めるのが順当だと思うのですが、私自身が再度見直す必要があるため詳細な内容の説明ができません。しかし、ここでは少しの簡単な応用で、生命の謎を解明するヒントになることを紹介します。ただし、左記に説明する内容の中では、一般科学常識と非常にかけ離れた事柄が多々出てきます。また、内容がまだはっきりしていないため論点が明確でないかも知れませんが、検討していただきご意見をお待ちしています。

原子核の周囲を回転している電子が、スカラー粒子と結合し、その軌道を内側に移行するのと同じように考えます。だとすれば、昼間太陽からの放射を直接受け、地球の電子や原子核がそれと結合します。結合と共に歪みと捻れが増して引力が強くなるので、この結合したスカラー粒子は電磁波と電荷に分裂し、電磁波は放射され我々の目に届き周囲を明るくしてくれます。一方、残った電荷は地球の電気的な活動を活性化することになります。簡単に、日の出から日没まで、電磁波の放射と電荷の蓄積が続くとしましょう。

さて夜になると、太陽からのスカラー粒子が届かなくなるため、これまで蓄積されてきた電荷に、宇宙からの電磁波を吸収結合させ、スカラー粒子を地球外へ放射します。これは、原子核の周囲を回転している電子が、その軌道を外側に移行するのと同じことです。

地球は内部からその地表まで、歪みと捻れに応じた物質および運動を行なっています。そして、地表には捻れの周期に応じたスカラー場の強い所と弱い所が現れ、細胞がスカラー粒子の集まる所に発生したように、樹木もスカラー場の強い所の方が健康で生育がよい。風水は捻れの科学だったのです。加えて昼と夜があるため、昼には太陽からのスカラー粒子を吸収します。電子の場合には、外側の円軌道から内側の円軌道まで移動するのです。電子はその円軌道の半径差に応じた電磁波を放射し、電荷を蓄積することになります。地球の場合には、樹木がその役割をしています。樹木は地表の歪み（スカラー粒子が引き合う圧力）と、地表よりも歪みの少ない樹木の先端までの歪みの差に応じた樹木特有の波動を放射し、太陽からの放射を化学反応の形で蓄積するのです。そして、地表の風水は捻れに相当し、枝分かれに相当します。動物で言えば関節です。つまり、歪みの圧力差は形態を直線的にするのですが、樹木が上に生長していく間に捻れが徐々に蓄積され限界になると、枝分かれする事になるのです。

夜になると、スカラー粒子密度が低下し、樹木がなければ昼間蓄積された分が放射されてしまうのですが、樹木のお陰で地球上に化

学物質の形態で蓄積されることになります。この蓄積された物を動物が利用しています。このように、昼と夜は動植物の進化にも影響したのです。ちなみに、人間の場合、黒髪は反磁性（外部の磁場と髪の内部の磁場は反対方向）で、白髪は常磁性（外部の磁場と髪の内部の磁場は同じ方向）なのも、この昼と夜の変化というか、生命の誕生から成長老化に対応しているように思います。

このような樹木の働きにより、地表のスカラー密度が安定に保たれ、歪みや捻れによる大きな電磁気的な変動が抑えられ、我々のような動物が生存可能な環境に進化したのでした。

植物の中にも幹が太く背の高いものは歪みを利用し、蔓や蔦のように地を這うような葉の大きなものは捻れを利用しているように思えます。動物に例えれば、四つ足動物と人間のような二足歩行する動物です。人間の場合、地表と頭部との歪み差の分だけ電気を蓄積できるようになり、これが知能の発達を促進したのだと思います。それというのも、人間に多い有随神経には、ご存じのようにマフラーのように絶縁物質が巻き付いているため、神経の電流方向に対して円形に磁場を巻き付けており、これが捻れに相当します。また、神経内外の電気的な電位差はこの絶縁物質により増大され、内側がマイナス、外側がプラスに帯電しています。この帯電による電気的な圧力は歪みに相当します。人間の場合、類人猿から猿人へ立ち上がることにより、歪みの増大と同時に電気的な活動が更に活発になり、形態上は捻れが少なくなったように見えるのですが、その他の部分にその捻れが大きく関与したというか、人類が哺乳類であり子供を育て教育し社会の中で協力しながら自然の中で生きていくことを選択した為に、前頭葉を発達させることになったのです。

一つ一つの細胞を見ても、神経細胞ほど極端ではないですが、動物細胞は球状で内側がマイナスに外側がプラスに帯電していて、この電荷のために細胞膜には非常に強い電界が発生しています。この電界は歪みに相当し、捻れは細胞の表面や内部の自転や、細胞間の結びつきや情報伝達の中に現れていると思います。また、臓器の形状位置などもまた、地球の歪みと捻れを無視しているものではなく、その制限内で生きているのだということです。

今後の理論の拡張についてですが、決して個人でできるものではなく、他の人との相互理解により更に正しい方向へ向かうものと思います。例えば相対性理論については、フルネセレー系間で共通な光の速度を基準として、相対性理論と同じ様な論法が成立するものと推測されます。しかし、それでは「質量とは、電荷とは、誘電率透磁率とは、プランク常数とは、陽子とは、電子とは」等々の問いに答えることができません。そこで、流体力学のような微少領域での「歪み／回転／移動」を、フルネセレー系に導入し、これらの物

理量を定義することが必要です。そして、各フルネセレー系間の相互作用を発見し、この発見に基づいて物質とスカラー粒子、スカラー粒子とスカラー粒子、波動とスカラー粒子の相互作用を検討する必要があります。

更には、生命や意志を含めた宇宙とその進化を、個人の、ひいては我々で可能な限り正しく理解し、その中で人間に与えられた役割と果たすべき義務を、その人間関係の在り方を問い、追求し、崇高な神と自然に対する信仰心、信仰心から更に進んだ宇宙の秩序を実践し守る愛について、その根元を宇宙の中の隅々にまで発見できればと思います。その発見が正法に踏み込んで学ぶ勇気を起こさせ、努力が正しい理解へとつながり、これからの人類の希望と幸福につながることを願うものです。

☆「三、太陽系の秘密」の追加補足――

Ⅰ、謎のモントーク計画と宇宙人達

左記でモントーク計画について説明するのは、宇宙人供与によるこの計画で開発されたと思われる技術が、地球で起こる不思議な現象として人体発火や、空中から石や魚が降ってくる現象や、重力異常、今左翼ゲリラが使用しているマインド・コントロール、生体と思考モニター及び人体への攻撃、テスラーコイルを使用したハチソン効果などのすべての現象を網羅しているため、この計画自体の真実性と、どこまでが嘘なのかという問題もありますが、この計画について検討することが重要だと思われます。なぜならば、反キリストも含めて最終的には人類の完全な支配が目的である以上、共産主義者や左翼ゲリラを操る黒幕の影がちらついているように思われるからです。しかも、モントーク計画に関しては、宇宙人と米国の秘密契約や技術供与など、宇宙人との関係は切り離すことができず、別途詳しく宇宙人と地球文明との関連について調査する必要もあります。

モントーク計画に関する第三弾が米国では出版されているようなのですが、日本では出版されていません。また、『モントークプロジェクト2』さえも、絶版のようです。このような状況の中、更に詳しい情報をご存じの方があれば、教えていただければと思います。

―絶賛発売中！―

天と地のはざまにて星を仰ぐ―

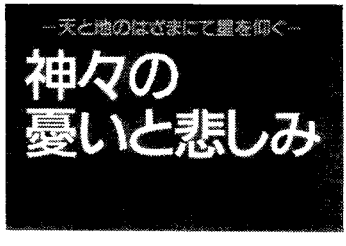
神々の憂いと悲しみ

千乃裕子著／ＪＩ編集部編

私は真理と真実のみを喜び、虚偽と偽善を憎むように、天の神々に育てられました。また、天の至高善と至高の徳のみを唯一の己の資産とするべく、神々に導かれた古代の賢者や哲人、天与の知恵を以て民族の危機を救った賢明なるリーダー達を、心の師として、自ら精神を磨き、向上させるよう天の神々に教え導かれました。

（著者「あとがき」より抜粋）

定価（本体2719円＋税）

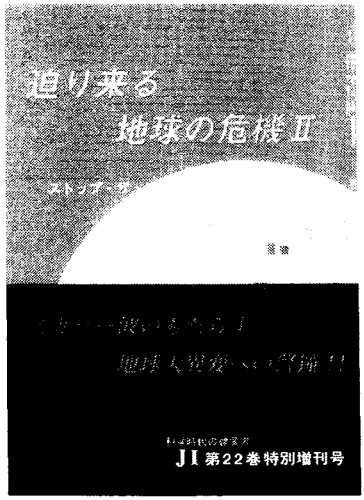


絶賛発売中！

迫り来る地球の危機 II

ストップ・ザ・スカラー兵器！
—地球崩壊の阻止に向けて

科学時代の啓蒙書

JI 第22巻特別増刊号

定価（本体1200円＋税）